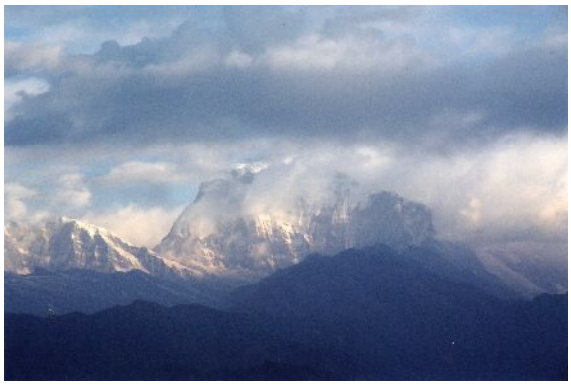
しぇんしぇい　の
アンナプルナ・豊穣　日記

（アンナプルナ内院とプーンヒルトレッキング１９日間の記録）

2004年3月13日（日）～3月31日（金）

文と写真　：　石渡孝司

ＡＢＣからアンナプルナＩ峰の朝焼け



プーンヒルから東雲のダゥラギリ

2004 年 3 月 13 日 （出発前夜泊）	
20:00	自宅出発　羽田東横イン宿泊。

2004 年 3 月 14 日 （羽田／関空／カトマンドゥ）	
07:35	羽田空港出発～関空 9:00O着
	NEC中野氏に見送られて羽田を飛び立つ。
15:00	関空、3 時間遅れでカトマンドゥへ（上海経由）。
21:00	カトマンドゥ着。コスモの車でホテル・ギャンジョンへ。4回目のカトマンドゥの街、懐かしさひときわ。
21:30	ホテル着　コスモのジョシ氏が出迎え、途中ハスタ来る。
	打ち合わせ10分。

2004 年 3 月 15 日 （カトマンドゥ）	
07:30	カト空港へ。天候不良、9:00 発、ポカラ行き飛ばず。
曇り、雨	ホテル出発時コスモの車15分遅刻、ハスタ、私のカメラ積み忘れ引き返す・・・。おい、オイオイの
11:30 頃	思い。
	カトマンドゥ発　ポカラへ、ポカラ上空天候不良で着陸不能
16:30 頃	カトマンズに引き返す。 空港内待合室で待機。激降雨。
19:00	ポカラ行き飛行中止　ホテルに引き返す。ジョシ氏から電話
	中華の誘い。デビ、三人の客とハスタ、私。

2004 年 3 月 16 日 （カトマンドゥ／ダンプス）	
07:30	カト空港へ　9：00発は飛ばず、他社のポカラ行きは飛行
12:00 頃	他社に換えてポカラへ。コスミックの機体は大きくエヴェレスト方面の遊覧飛行の帰り、日本人団体
曇り	に我々が便乗。
晴れ	待機中に、同じくネパール航空の遅延用に関空で買った文庫本を読了。 帚木蓬生「三たびの海峡」良心を感じる。
12:30	ポカラ着　空港から手配済みのタクシーで出発。しかし、空港近くでポーター3人を雇うために待機。暑いこと。突然、カンチェの時のキッチン担当ラダマンが現れる。握手！
13:30	フェディに向けて出発。小型車に6人牛詰。
14:10	フェディ着。ランジット等5人と合流。 なんと合計9人！！
	<u>内訳</u>　ガイド　ハスタ（29歳）、ランジット（19歳）キッチン　ディネス（29歳）、サムライ（プルナ35歳）、バララム（25歳）、シェーパ（20歳）ポーター・リンジ、他 2 名（紹介なし。後日、ランジットから聞き取る）
	＊　ランジット、サムライとカンチェンジュンガ以来 2 年ぶりの再会を果たす。互いに感激のハグ。
	他のスタッフも好印象、やっとこ良い旅の予感、万感、夢気分。さあ出発だ！！
15:00	フェディ発　ダンプスへ　宿泊予定地ポタナを変更。即急石段。
16:30	ダンプス着。テント泊　ぼんやりとマチャプチャレ。
	押し売り紛いの自称チベット難民？男女、テント入り口で粘る。

2004 年 3 月 17 日 （ダンプス／ランドルン）	
07:30	ダンプス発。 途中のチョウタラで日本人の団体に会う。
	私の18日間一人旅に驚く。これ以降タダパニまで邦人ツアー客に一回も会わず。個人も3，4人。
晴れ	欧米人のオンパレ。
14:00	ランドルン着。 直前下りの石段で右膝を傷める。テント泊
	道路脇のテント場の所為か？一晩中点灯。（後日、24 日にこの付近で軍とマオイストが交戦、兵4人村民1人死亡と聞く）

2004 年 3 月 18 日 （ランドルン／チョムロン）	
07:30 14:30 晴れ 曇り	ランドルン発。 膝にはサポーターを巻く、ハスタ不調風邪。 チョムロン着。 テント場にヒルがいるのでコテージ泊（自弁ならOKと、勿論）。 山の一部が時たまチラリ、すぐ雲の中イライラ。夜8時頃から庭でグルン族の人達の伝統芸能会、素晴らしい音楽と踊りをたんのう、集めた金で道を整備する由。

2004 年 3 月 19 日 （チョムロン／バンブー）	
07:30	チョムロン発。5 時半シルエットのマチャプレが素晴らしい、6時、左上空に朝日を浴びてセピアに輝くアンナサウス、ウッハー！ 絶叫・・・。元気百倍。立派な石段を下る。でも、これが膝にくるんだな。ハスタ、私のリックを奪う、感謝。 下りに下ってまた同じだけ登り返しシヌワでお茶。振り返ればチョムロンの村落設定の素晴らしさに驚く。農耕、防備、交通面。 ハスタ曰く、大きなコテージの主は温かいマレーシアに住んで、使用人に村の店をやらせていると自嘲気味。でも才覚には納得。
12:30 晴れ	バンブー着。コテージ裏のテント場で昼食、全員で洗濯。4時頃からの降雨、次第に強まり7時頃には激しい雷雨となる。意を決しハスタにコテージへの変更を申し出る。デビの顔浮ぶ。
雷雨	１０時頃部屋の間仕切りのベニヤ板を山猫？がデカイ声で威嚇しながらガリガリやるのに魂消る。 １２時トイレに出ると真っ黒な空に碁盤の石のように星が置かれていた。これにも吃驚。 さっきの猫は、病気だった盆子がもしや・・と気になる。

2004 年 3 月 20 日 （バンブー／デオラリ）	
07:30	バンブー発。5歳の坊やを連れた日本人の夫婦が私の和食の夕・朝食をみて驚く。まったく毎食が楽しみの料理でディネス達キッチンの腕の良いのには感服。そして感謝。ナンタって食事！ ハスタ不調今度は歯痛とのこと、今まで拒んでいた日本の薬をやっと服用（バッファリン）してくれる。 山道らしい道にほっとする。石楠花が多くなる。高い山は雲の中。ヒマラヤホテルの或るコテージでミルクティーを飲んだ時、釣り銭で嫌な思いをする。 ここは、なんだか目つきが悪い。 ヒマラヤホテルを早々に出て、デオラリのコテージが見え始めた頃、大滝からの激流が行く手を阻んでいた。昨夜の降雨で増水したらしく橋代わりの石が冠水している。私がハスタの後を渡り始めた時、対岸で出迎えていたサムライ（プルナ・ライ）が危なっかしい私を見かねて激流に腰近くまで入って手を差し伸べ、渡らせてくれた。 彼の手を握った時の力強さと渾身・捨身の友情を今でも涙無しでは思い出せない。渡り終えて手を入れた流は氷以上の冷たさだった。彼以外誰にこんな事が出来ようか、カンチェで私がつけたニックネーム＝侍は真の THE LAST SAMURAI だった。永遠に感動、そして魂底からの感謝を捧げる！
13:00	デオラリ着。テント場が狭く隣のコテージの下水が臭い。どうもチョムロンからテント場の条件が良くない。思い出してみると今までテントは自分の一張りだけである。欧米人が圧倒的に多い所為か何処も温水シャワー付きの瀟洒なコテージばかり。 コテージの広場にあるテーブルで昼食をとっていると休んでいる欧米人だけでなく村人達にじろじろと見られているのを意識する。それをハスタに云うと一人で8人（一人はチョムロンで解雇）もスタッフを連れて歩いてんだから日本の金持ちという訳さという答えがあっさり返ってきた。 そう云えばダンプスからずうっとだ。（その時は9人！） 嫌な予感。 夕方、曇った空の下、別の広いテント場を散歩しているとハスタが付かず離れずについて来る。広場にいる現地の若者が 3 人、こちらを注視している。ここに着いてから、笛吹きバララムをはじめ皆が妙に静か。やはり夜8時頃、3 人がテントの上の畑を大声出して通り過ぎながら石をテント近くに投げ捨

	ててい った。金持ち日本人めか。なら金持ち喧嘩せず。

2004 年 3 月 21 日 （デオラリ／アンナプルナBC→ABCという）	
07:30 晴れ	デオラリ発。ハスタ元気、私のリックを事も無げに持ってくれる。天は晴れているのにモディ・コーラに沿った道は両側の崖山に挟まれて薄暗い、いよいよだなという感じが迫ってくる。 10 時にマチャプチャレBCに着く。見上げるとテント場の土手に続いて逆光の太陽に照る岩峰がランドマークタワーのように屹立していた。マチャだとハスタが云う。魚の尻尾どころの話ではない。もう少し離れて見たいという気持とアンナプルナそのものを見たいという願望が募る。 お茶を頂いていると下方のコーラの上をガスが這うように登ってくる。たまらずハスタにここに泊らず、アンナBCに行くことを懇願する。彼はパルスオキシメーターで計測後OKを出してくれた（ABCでの計測後彼は「先生は凄い、これなら7500mまで登れるよ」と呆れたように云って笑った）。
10:50 晴れ 曇り	MBC発。ビスターリを変えられない僕をガスがドンドン追い越して行く。何これが高山病にならない秘訣さと自己暗示。 急の変更、出立にも嫌な顔一つせずクルーはガスと共に雲中に消えていく。全く良い奴ばかり。 追い抜きざま、自分の体より大きい背負い籠を担いだサムライが「しぇんしぇっ、ビスターリ」と叫んでくれる。高まる興奮でランジットの歩調につい合せてしまう。 やっとABCのコテージが見え始めた時、それ以外即ち山は厚くて墨色の走り雲に包まれていた。半分諦めて足元の道を探して歩いて時、ランジットの上ずった声に促されて背後を見るとなんとマチャが白雲の切れ間の中に上半身を晒しているではないか。鉈で切り裂いた大岩壁、何という山容なのだ。しかしそれもあっという間にお隠れ。 ランジットとハスタの会話にチンチンという言葉があったので意味を聞くと「あっという間に」だそうである。それならとチンチンの日本語の意味を教えて三人で大笑い、まさにマチャプチャレは偉大巨大なチンチンだ。
12:45	アンナプルナBC着。三軒あるコテージの間を抜けて雪の無い草原のようなテント場に至る。奥は無数の大岩と土手があるのみ、上空は厚いガス雲。キッチン小屋から見える所を指定し、草原にたった一つの吾がテントが張られる。ハスタにトイレを聞くとコテージは貸してくれない、指差す小屋には便器はあるもののコテージ側の壁が崩れ落ちていて使用不能、そして目線は平原の奥、あッそう、それもいいかとお出かけ。ところが途中で雲間からとんでもない山の一部がチンチンに現れチンチンに消えていく。慌ててテントに駆け戻りおっとり刀でカメラを向けるが後の祭り。その後、野天で美味しい昼食と 3 時のお茶を頂く。しかしチンチンは起こらず、ハスタ気の毒がる。なに山の天気には勝てませんなどと強がるが、気持的にはやはり日頃の心掛けがと弱気。 が何と、その反省が効いたのか4時頃からチンチンが頻発にやって来る。走りガス、乱れ雲の間と云わず上下と云わず、彼方此方から仰天の山肌が超チラリズムで乱舞。そしての6時、下部が薄黒くなった遥かの高みの雲が一線切れて紺碧をバックに銀色の稜線が現れた！それもチンで消滅。ハスタ曰く、でもあれは1峰でないね、でも天気駄目でごめんとまた。いや俺はこんな墨絵みたいなのも好きなんだと本音を云ってもやはり無理。 土手に見えるのは氷河に削られた山斜面、怖くて覗けない足元は一気に数百m切れ落ちている。昨年一人、写真撮りながら足を踏み外し落ちて死んだとサムライが心配顔に教えてくれる。 夕食はトイレと同じくコテージの食堂を貸してもらえないのでキッチン小屋でいただく、流石に雪の深いABCだけあって石造りで大きい、土間に座って促すと恥じらいながら一緒に食べ始める。こちらが客とスタッフというより仲間同士のつもりでも彼等は一定の距離を崩さない。それはそれで立派である。肩を張らせない内にテントに引き上げる。下の村から付いてきてしまったらしいヒマラヤ犬がテントの周りを駆ける足音、氷河の軋む音、そして深くて大きい夜のしじま。いつしかその底に引き摺り込まれていく。身を任せるしかない。 久しぶりにぐっすりと一眠りしてションに這い出すと期待に反せず全ての雲は掻き消えて満々天の星

	の空、見上げる目の半下に青銅の光を感じ見回せばそこには静寂の岩嶺がぐるりと鎮座しているではないか。何だこりゃぁ！　訳も解らず背骨に怖気が走り、よろよろとシュラフに潜り込む。

2004 年 3 月 22 日 （アンナプルナBC）	
05:30	3回目のションに出て、そのままモルゲンを待つ。 朝の明るさが360度の展望を可能にし、山山の頂きをまるで鋸の刃のように映し出している。マチャプチャレ（6993m）、ガンダルバチュリ（6248m）、アンナプルナⅢ（7555m）辺りまでは上がりつつある青い斜光に群青のシルエットを競い、ヒュンチュリ（6441m）、アンナプルナサウス（7219m5：30、 ）、バラハ・シカール（7647m）、アンナプルナⅠ（8091m）、カンサール・カン（7485m）、タルケ・カン（7193m）、シングチュリ（6499m）、グレイシャードーム（7193m）が左から右にずらりと幕開けを待ち、目前のテントピーク（5663m）は氷河上の奇怪な岩嶺の上にぽつんと乗っている。 土手の上に、奥の岩上に何人かの人影がやはり時を待っている。風も音も無く、一切の動きが消えて視線はアンナⅠ峰の頂上から離れない。
快晴	網膜に痛いような刺激が走った瞬間、金色の光が最上の稜線を背後の宇宙から浮かび上がらせその面積を一気に広げていく。横に縦に光が走り、かつ鮮やかな桃色に染めていく、何と凄く美しい自然現象なんだ。どんな混色とどんな技法を使ったらこんなことが可能になるのだ。10分も経たないうちに幕開けを待っていた全ての山が色付いていった。そして気付けば荘厳なるアンナプルナ空間。 燦燦と朝日を浴びた屏風のような連山が私をぐるッと取り巻き、おこがましくもそれに対し私は握ったタクトを狂ったように振るっている。まるで古代ギリシャの劇場か、古代ローマのコロセウムの真中に立ち、満席の客席をバックに光彩で燃え始めたアンナプルナ山群オーケストラを一気に豪華絢爛のクライマックスにもっていくために。 酸素不足による幻覚が私に白昼夢ならぬ早朝夢を見させているのか。いやそんな事はどうでもいい。現にアンナプルナ山群全体がモルゲンロートに染まり、色彩の大協奏曲を奏でている。
07:30	アンナを眺めながらの野天朝食、朝粥に持参のふりかけをこっそり振り（デュネスごめん）、これがまた乙なもの。
09:00	ハスタに断り、ランジットに頼みヒュンチュリに連なる裏山に一緒に登る。アンナⅠをスケッチブックに描き始めると、暫く見ていたランジットが、気を利かせて離れる。そんな事は今迄もしばしばで本当に感心する。教えて出来ることではない、天性のものだろう。アンナⅠに簡単に色を塗り、アンナサウス、マチャとスケッチしていると昼の太陽が全身を焦がし、吹き上がる風が心地良い。下手なスケッチなんかしているより、比類ない景観に身を委ね、ぼう一っとしている方がよっぽどましと道具をしまう。ランジットも目を遠くにやっている。私も陶然としてすり鉢型の連山とその内側に浮ぶテントピークを見ていると突然頭の中で「ここは母なる子宮だ」と云う声がした。そうか、だからアンナプルナは豊穣の女神なのだ。凄い命名、これ以上的確な命名は無い。土地の人々の願う豊穣を生み出す源泉。しかし、年若く、日本語学習中のランジットに誤解されるといけないので、心の中で何回も呟きながら下山する。
10:30	テントに帰着。裏山から見ていた時からスタッフ達が、笛を吹いたり、ごろ寝したり所在無さそうにしているのに気付いていたので、岩に寄りかかって日本語教則本を読んでいるハスタに、俺のため今日は仕事にならなくて悪いなと言うと、違うね、皆大喜び、だってお金貰って休めるんだからとにこにこ顔で云う。あっそうか、そりゃあそうだ。キッチン以外は一日楽しく休養。有給休暇は日雇い労働者にとってこの上ない贈り物。自分の若い頃を思い出し彼等のはしゃぐ気持が良く分かる。「ここにいて　遊べや金の　ない雀」と無理に合体。
12:30頃	早めの昼食を頂き、テント脇のござの上で横寝をしてアンナⅠを飽かず眺めていると、頂上から右に下った岩稜に人に似た形が浮かび上がってきた。無意識に目や鼻を探すとそれらがはっきりし、出た岩が冠に、ヒマラヤひだが衣の様に見えてきた。まるで観音様。そこで初めてハットして、慌ててスケッチする、すると何と気付かずにいたガスの端っこがお顔近くに迫ってくる。早描き出来ない己がもどかしくハラドキでカメラする。途中でランジットの声がしたのを憶えていたので、後で聞くと遊びに誘おうとしたけど先生が凄く夢中だったのでやめたという。そこで観音様のことをいい、指差しで教えても僕にはまだ見えてきませんと健気に云ってくれた。

	その後は雲に消えてしまった女神・観音様をさがし求めて草原や土手を歩き回る。3時のお茶を持ってきてくれたその時のシェーパ・シェルパは落ち着かない私を訝しそうに見ていた。とうとう夕方になっても雲はど かず、チンチンはあれど気は幻視を追い求める。皮肉にもＩ峰のかわりにサウスが夕日を背に浴びて、光 彩をサウス氷河に流し込む。土手の奥を歩いていて石積みを見た時、何気なくママが浮び次に気付いて祈願を決める。航空券の一部を切り取り、・・の・・祈願とここに来させてくれたママへの感謝を書いてビニール袋に入れ、平たい岩石を探してその上に積み上げる。その石塔とチベット仏教の祈りの旗の直線上に深青の逆光をあびたアンナサウスの姿があった。 テントの方に少し戻って行くとサムライが心配そうな顔をして待っていてくれた。ネパール語しか話さない男の無言が一層心に沁みる。そしてその後、私がカメラを持ってテントを出るとハスタかランジットが必ず付いて来た。ありがたくて私はテントの近くでの徘徊で満足した。 その日からだったろうか私は「人との出会い」に恵まれるようになった。山に来て山だけでなく人と出会う、これは勿論ヒマラヤだからこそなのだろう。ヒマラヤとはそんな自然なのだ。 それらの内、アンナ内院に詣でる三人の日本の若者をまとめて書いておく。（※）

アンナプルナⅡ峰（左）とマチャプチャレ
（ＡＢＣ裏山から）

清麗アンナプルナＩ峰と筆者　（ＡＢＣにて）

アンナプルナＩ峰南壁（ＡＢＣから）

（※）

22日の夕方だった、一人旅の青年がたった一つの私のテントを見つけ、それが日本の爺様のだと知って近づいて来た。ミュージシャンだといい、似合うロン毛とヒッピー風のいでたち、目には聡明さと憂いと一途さを静かに湛えている。行き詰まった音楽をここに来て何かを感じ乗り越えたかったとストレートに語り、牛小屋同然の小屋での夕食に誘うと喜んで参加した。ネパール人スタッフの食事をなんのけれんみもなく美味しいと言って綺麗に平らげ、その後、音楽踊り好きなネパール人らしくスタッフの一人が笛を吹き始めると彼はいつの間にか箸やスプーンを使って器を弾き、彼等のリズムに合せて見事なパーカッションを奏でた。全員が乗りに乗って歌い、数人が嬉々として踊り、もう、何じんも関係ない渾然一体の陶酔の世界がそこにあった。終わると彼はスタッフに深深と頭を下げ、こんな素晴らしい体験をさせてくれてと涙ぐみながら心底からの礼を言う。それを驚きと敬愛の目で受けるネパールの若者たちの美しさ。漆黒の夜道をランジットが彼をコテージまで送る。

翌朝5時半、彼はテントに近づき昨夜の礼を云い、もし壁を越えられなかったら、カナダへ行ってワーキングホリデーをするつもりだと云う。小さく手を振るってモルゲンロートのアンナⅠ峰と出会うために彼は氷河の土手の奥に消えていった。

23日夕、宿泊地ドバンで出会った高知大学農学部の学生。植林のボランテアのためにチトワンに来ているが、グループの中でアンナBCへのツアーが企画され参加したという。大人しそうだが澄んだ目に意志の強さとやはり汚れのない一途さがある。私が読んでいた　小熊英二の「単一民族神話の起源」や他の著作に強い興味を示し、最近、ボランテア活動をすればするほど自分はもっと社会科学系の本を読まなければ駄目だ感じているのですと洗濯物を手にしたまま、自らを率直に吐露してくれた。明日、アンナプルナ内院に向かうという。

28日午前中、ウレリを発ってビレタンティに向かう途中ですれ違った若者。私が畑の中の道を大きな声で歌いながら下っているとガイド一人を伴って上がってきた青年がすれ違いざま、いきなり「演歌なんて歌ってんだから日本人だよね」と大声でエールしてきた。「おお！そうよ」と答えて見た彼は何とヤンキーヘアー、何処までと聞くと「決まってるじゃん、ABC に」と図太く答え、しっかり目を合せて二言三言問答したあと、180cmはあろう立派な体躯にポーター並みのリックを背負い、目の鋭い中年のガイドに従い、大股で登って行った。

気付けば太陽は真夏のように照りつけ、周りはいつの間にか石楠花の代わりにまるで南国のようなバナナの葉が谷間に揺れている。 暫くして、ランジットの足跡を辿る私の胸に嬉しさとも喜びともつかない感動が嗚咽のようにこみ上げてきた。悲しいかな三人とも日本では評価されないタイプの若者達だろう。私はそんな日本が情けない。彼等は自らの天分をずうっと認められずに学校歴を過ごして来たことだろう。そして今、これからの人生に立ち向かう為に傷ついた心を再び奮い立たせようとアンナプルナ、豊穣の女神に、そして、私の見た観音様に健気に詣でようとしている。

「アンナプルナよ、どうかあの子達を癒し、勇気をお与え下さい。あの子達こそ真っ当な心根を持っております」 私は、何回も何回も振り返りながら心の中で叫んでいた。これぞ演歌、ヒマラヤ演歌を！

2004 年 3 月 23 日 （アンナプルナBC／ドバン）	
05:30 快晴	前に書いたミュージシャンが奥に去った後、私はテント近くでひたすら私の観音様のお姿を待った。5時50分、頂上が光を受け、アンナプルナ全体に黎明を告げるとそれが滑るように冠に近づく、もう私のどこにも幻視かなどという疑いは無い、次にはっきりとお顔と目を浮かび上がらせる。インデアンイエローにクリムスンレーキを混ぜた薄い赤黄色そしてピンク色のヒマラヤ襞が縁取り、息をのんでいると一気に光が走りタルケ・カン、シングチュリまでを照らす、なんとそこにはお姿の下半身、つま先までがモルゲンロートで映し出されている。目を細めるとお姿全体が光明を発しながらしなやかに天空に浮んでいるではないか。 私は、なんという光景を目の当たりにしているのだ。 声とも呻きともつかないものが喉から絞り出て、ただ愕然、呆然とするばかり。しかし、光量は寸刻を競って増していき、

	お姿は昨日の昼の印象に近づいていく。 背後から、ランジットの優しい声が朝食を告げ、私は我に返る。ダンネとお山とも彼ともつかずに手を合せる。野天の莫蓙上でサムライトとシェーパが手厚く給仕してくれる。朝粥に何も加えず、おかわりで頂く。天上の園を実感、そして、全てに対し、「ダンネバード」を、心身の奥底からゆっくり呟く。 カトマンドウ出発前夜の中華料理での不調を正露丸5錠で食い止めて以来、入・出口とも快調、これも一重にデュネスを始めとするキッチンクルーのお陰である。これは高山病以前に最重要事項の一つ。出発10分前、例によって奥地に適所を求め、番をしてくれるワンちゃんに見つからないように細心の注意をはらって出かける。岩陰で用の途中、けはいを感じて振り向くとなんとワンちゃんが尻尾を千切れんばかりに振るって背後にいるではないか、嗚呼神様どうしよう！こらっ、あっちへ行けといってもワンちゃん日本語知らず、そして途中の主はネパール語知らず。咄嗟にポケットの黒飴を投げて難を逃れる。 出発時、迷番犬が寄ってきたので、事の顛末をハスタに漏らしたら一気に噴き出し、みんなに通訳、誰かが「しぇんしぇ、舐めて貰ったから、紙いらなかったね」と叫んだらしく、全員腹をよじって大爆笑・・・。背景はアンナプルナの大絶景だった。
07:30	百・千・満感をこめてアンナ内院を出発。詰り離脱！ ハスタいつに無く快調、私の未練を断ち切るように下る足並みもランジット並、そうだこれでいいんだと言い聞かせる。乱れる石段に気を取られているうちにあっという間にⅠ峰は消え、サウスも半分になる。サーダー写真とせがむともう大丈夫かなという顔をして「どうじょ、どうじょ」と止まってくれる。(この快調さと余裕は高山病の危険がある最高地点を無事降りたことによるものだと後で知る。ハスタ・サーダーご苦労さん) MBC 付近でマチャの左にアンナⅢやガンガプルナが顔を出す。今日も暗い感じの谷間を抜け、苦しそうに登る外人(？)にナマステなどと声を掛ける。三人の日本人青年に会う。今夜は MBC 泊りだが荷物を MBC にデポして ABC に向かうという。自分のことを思い出し、このまま行って MBC に泊ったほうが良いとお節介をする。下りながら高山病の事を考え反省する。どうか無事でありますように(ところが、タダパニで掴んだハスタの情報に拠ると彼等は途中ティルケドゥンガのコテージで盗難にあい貴重品を全部盗られたそうである)。
11 時頃	デオラリに着く。登りに日本語で声を掛けてくれた隣のコテージのオヤジさんが笑顔で迎えてくれる。然し、17、8になる娘は私が見た時はかならず長い黒髪に櫛を入れていた。そして、わがキッチン隊が使った小屋で他のグループが賑やかに仕事をしている。今度は金持ち日本人ではないのだろう。 ハスタ、ランジットと三人でミルクティーを飲む。行きとは打って変わって無愛想なお上さんのティーはやはり不味かった。 デオラリを出て、サムライに助けて貰った川にくると水の少なさに驚く。あの時の事はまるで夢のようである。しかし、だからこそ私にとってはどこにも無く二度とない得難い体験、宝物なのである。
12:15 頃	ヒマラヤホテル到着、13：00 出発と記録していて、時間の間隔からして昼食を取っている筈なのにまるきり記憶が無い。行きに嫌な思いをしたからなのか・・・・。ボケたかと無理して思い出せる幾つかの情景を追っていると、村を出た所でランジットが教えてくれた発電小屋が浮ぶ、連動して行きと違うコテージの小さな部屋で仕事しているクルーの姿が出てきたがそれまで・・・。 しかし、思い出せないのに無理に思いだそうとすることはない。思い出せないのはそれだけのところだったのだろうし、それより心に残るもっと楽しい事があったからだろう。
13:00	ヒマラヤホル発。そう！その楽しい思いではランジットが教えてくれた村外れの小さな水力発電小屋から始まりドバン、チョムロン、タダパニ到着までずっと続くことになる。 発電小屋あたりから樹林帯に入り、道は山腹を巻いて緩やかである。見通しは良くないが時々残っているヒマラヤの大木の下を歩くのもこれまた格別に好いものだ。すれ違って上がっていくのは欧米人ばかりでアジア系は皆無、遊び方を含めて世界のお金持ちはなんたって彼等だ。水洗トイレ、温水シャワー付き個室だけの清潔コテージ、10年もすればスイス的風景に変えられてしまうのだろうか。

	そんなことを考えている私の頭越しに前後のお二人さん（ハスタ、ランジット）が盛んにネパール語を投げ合っている。話のきっかけはいつもランジットからだが、かならずと言っていいほど「ママ」と呼びかける。そこで意味を聞くと「おじさん」だという。とうとう何故ハスタをおじさんと呼びかけるのかは判然としなかったが、日本いや世界中で「ママ」はお母さんへの呼び掛け言葉だ、ハスタはランジットのおかあちゃんか云ったら、ハスタも乗ってランジットをからかう、するとランジットが顔を赤くして懸命に否定するので大笑い。 ハスタは急な下りや登りになると私のリックを持ち、一定の歩調で歩いて行く。この客に合せる歩調をずっと継続することと適当な踏み場を見つけながら歩き続けることはなかなかできるものではない。そして彼もランジットに引けを取らない勉強家なのである。今までの毎日、彼は閑さえあれば日本語教則本を開いている。カンチェの時はみせなかった英会話の力にはびっくりだし、日本語も仕事に使えるとくれば大したものである。 道すがらの質問の一つに日本人の「結構です」の使い分けがある。否定の場合と肯定の場合を例に上げて説明すると納得し、泊ると滞在の違いなどを真剣に聞いてくる。 ランジットも「片付けます」と「片付きます」の違いを熱心に質問。歩きながらの説明だから「ナマステ」「ナマステ」で途切れ、ご機嫌の二人（ボクも）の歌声で途切れ、でも移動日本語教室は楽しく続く。時間はチンチンに過ぎ去ってしまう。
14:15	ドバン着。真っ赤な石楠花に囲まれたドバン、簡易舗装（？）された道路の北側に3軒のコテージがあり、その真中のコテージの道路の南側にあるテント場を利用する。実は行きにこのテント場を見て、ここならいいと思ったのを憶えている。道に沿っているものの3m近くの段差があり、二棟のキッチン小屋が東西二方を塞ぎ、残るは深い渓谷である。 宿の人も良い感じで、8 人連れに驚いてはいてもそれ以上のものは無い様子だ。私もハスタ説に被れ、俺も一生で一度位金持ち気分を味わうかと開き直り気味ではありましたが。 ハスタに言わせると先生は日本では貧乏かもしれない（髪が長い）が、ネパールでは金持ちね、だって先生は俺たちを 9 人！も雇ってくれているが、外人はコテージ泊りだからガイド兼ポーターで1～2人だけしか雇わない、だからせんせいの方がお金持ちねだそうである。しかし、コテージにとっては部屋代＋食事代＋飲み代を払う欧米型のほうがキャンピング客より上客に違いない。だから、キャンピング客にはトイレも貸さない、食堂も使わせない（ABC）なんていうのが出始めているのだ。 前に書いた高知大生にここで会うわけだ。ハスタが彼を呼び止めてくれて、食事をおえたテラスで話し込む。 テントに入ると間もなく私は深い渓谷の絶え間ない水音を耳にしながら、翌朝4時頃まで熟睡してしまった。やはり、達成感と疲労と安心感がそうさせたのだろう。

左からデュネス、ランジット、ハスタ
チョムロンからアンナプルナ・サウス

チュイレからダグロンを望む

2004 年 3 月 24 日 （ドバン／チョムロン）	
07:30	ドバン発。6時半頃、テント脇で村の犬に右大腿部を噛まれる。ふざけてだと思うが狂犬病のことがすぐ頭に浮ぶが、見ると歯は食い込んでいなかったので少し安心する。サムライが叱ってくれる。ハスタに保険のことを云ったが通じなかったようである。 出発直前に道路でストレッチをしていると ABC で知り合ったタメルでホテルを経営しているというシムハダさんに会う。目の大きい社交的な人柄である。息子が日英やるのでメールをくれとのこと、途中でかれが案内しているベルギー人３人と写真を撮る。 道は昨日と同じようで巨木の間を抜けたり、竹林の間を行ったりしている。ドバンでは尻尾の先だったマチャが登りで振り返ると驚くほど天高くなっている。ハスタが知っているビューポイントでいきなり振り返り、「シェンシェ、Ⅲ」と教えてくれる。もう見られないと思っていたので、感激の再会だった。 今日も三人ともご機嫌、中でもランジットはハスタにママ、ママかネパールの歌を唄いっ放し、そして時に「せんせい」に日本語の質問、あまりの上機嫌を私が訝ると前のハスタが「ランジット、荷物軽いね」と言って笑う。見ると本当に私のザックが無い。そこで三人大笑い。暫く木々の間を下っていた時、唄っていたランジットが急にやめて、「せんせい、わたしですね、昨日、将来の事まだ決まってないと云いましたが、決まりました、私は歌手になります」と叫んだのでハスタも私も手を叩き大声で祝福し笑い合う。なんとユーモアーのある子なのだ。 同時にその時私は、彼が私のために私と一緒にいたくてこのトレッッキングに参加したのを初めて知った。言葉にならない熱いものがこみあげて足元が危なっかしかった。 クリデイガールに近づくと電気配線の工事が行われていた。ランジット　　が道端に置かれた電柱を指して日本語では木材というのかとの質問いや電柱というと答えると少し怪訝な顔をしたので、例のポプコーンととうもろこしの関係さと言うとにこっとして分かりました、原料、材料と製品、作品の関係ですねと答える。 この話には忘れられない事が前提になっている。 二泊目のランドルンで夕食にプラスされてポップコーンが出されていた。給仕してくれていたランジットが話の種にしようとしたのか「このマヨリハシは」といってポプコーンを指したので、違うと指摘すると、ネ・日辞典を出して「とうもろこし」を示し、再びポップを指して今度は「とうもろこし」とはっきり云う。発音が良くなかった事と、でもこれはポップコーンというのだというと前のコテージに泊っていた日本人もこれを「とうもろこし」といったと必死にがんばる。 そこで、私は材料と製品等の関係をじゅんじゅんと説明した。諒解したものと思っていたら、翌日の朝、彼の態度を見て諒解どころか、こじれているのを覚る。簡単にいえば、むくれきっちゃっている。挨拶どころか彼の分担の仕事も私の前ではしない。それを知ると私は NO をはっきりだして彼を拒否する。サムライが驚いて代行する。 私の態度に驚き、かつ反省したのか朝食の最後に給仕に着たので、私の考えと怒った理由をゆっくりと云って聞かせる。 ＜小さな事で君と私の大きな友情を壊すな、気に入らないことがあったら理由を聞け、そして私情を仕事に持ち込むな。だがもしも私が君の仕事についてとやかく言ったら、はっきり抗議反論をしなさい。＞ 以来彼はカトマンドゥで別れるまで決して同じこと繰り返さなかった。何という聡明さと勇気とすばらしい人柄の持ち主なのだ。カンチェンジュンガでの出会いがまた一層深化したのを感じる。ダンネバー！ 観音様のお陰と言っている「人との出会い」はアンナ参道を歩き出したらすぐに始まっていたわけである。そしてこの後、観音様は私を試練に立たせるハスタとの出会いをご用意なされて

	いる訳である。それはタダパニの夕方4時からのこと。
12:15	シヌワ着。楽しい雰囲気のままゆっくりと下る。ノースリープに黒のタイツをはいた白人女性が背の高いリックを背負っている彼氏を探していた。慌てている彼女の英語を聞き取れるハスタは大したものだ。それにしても彼女、追いかけている筈なのに道であった村の子の写真なんか撮っているから不思議。 シヌワのキッチン小屋から皆が声を上げて迎えてくれる。見晴のいいテラスで昼食、居合わせた外人の爺が、珍しがって私の食事や箸捌きをカメラする。他にも若い欧米人がいて、その中の唯一人、アジア系の青年が日本人ですかと聞いてきた。僕は韓国人ですと言う、後は韓日英の片言会話だったが、ハングルをさぼったのが悔やまれること。彼は日韓の謙譲語をきちんと使って礼を正してくれた。カニサハムニダと言ったら有難う御座いましたと姿勢を正して答えた。清清しさを感じたのは自分に儒教的残渣が残っているからだろうか。でも、清清しさの発生源はそこだけではないだろう。ランジットだってとても清清しい青年だ。
13:00	シヌワ発。シヌワから下って下って吊り橋を渡り、今度はそれだけ登り返す。厚くて硬い石段に膝が悲鳴を上げている。ハスタがリックを持ってくれていてもだ。ふっとプーンヒルなんか行かずに帰ろうかという考えが浮ぶ。（後で知るが２４日にランドルン付近で王の軍とマイストが交戦したと聞く、ビチュック・デオラリまで降りた韓国青年　CHO　君はぎりぎりで難を逃れたろう）
14:30	チョムロン着。日当りの良いテント場が空いていたが、コテージ・キッチン小屋・ハスタの部屋等すべてからはるかに離れているので、それを云わずにヒルと言ってコテージにする。NO3は行きに泊った部屋、何故かとても懐かしくほっとする。今夜は客が少なく、村人の芸能大会は中止との事、これも何故かほっとする。夕方はサウスもマチャも雲の中、これにも何故かほっとする。やはり疲れの所為だろうか。泥睡の夜だった。

2004 年 3 月 25 日　（チョムロン／タダパニ）	
07:30 快晴	チョムロン発。５時に起きだし、５時半からサウスの日の出を待つ。６時少し前、期待に違わず、空前の（ここでは当たり前）のサウスが踊りだす。スゲーッが最適の表現。マチャはシルエット、どうも ABC からのマチャの迫力を見ている所為かここからのは物足りない。 がらがらなので庭のテーブルで朝食する。雄大な朝飯であります。夫婦の外人客が真似て朝食、ボクとウインクでご挨拶。三人とも金持ち。 出発直前、ここで解雇のポーターを頼んだランジットが連れてくる。チップを渡すと「有難う、またお会いしましょう」と綺麗な日本語でいうのに驚く、淋しげな表情で別れていった。（最初に帰ったポーターには用意していたが渡すチャンスがなく、今だに気になる。ハスタ不満、次の時ポーターが集まらないと）三人元気で出発、すぐにクルーに追い抜かれる。それにしても8人全員元気。さあ、プーンヒルでダウラギリだ！ チョムロンを出て右に巻きながら下る。日当りのいい段々畑がグリーンで埋まり、しっかりした農家の建物が点在している。途中から年配の女性が我々の後を付いて来る、ハスタが時々話している。聞いてみるとバンブーのコテージのお上だという、道理で着ているものがいい、隣村に行くそうであるが女の一人歩きは危険なので一緒している由。石灰岩が自然崩壊して危険な個所を迂回してキムロン方面に降りていった。（今思えば、お上はその時、下方地帯での交戦を知っていたのか） 三人で巻き道を行く。左前方のコーラを隔てた山の高みに光るものが目に入る、あれが目指す今夜の宿泊地、タダパニだとハスタがいう。 その頃、私はランジットの口数や歌の少ないのに気付く。見ればやはり、私の荷物が彼のリックの上に乗っている。今朝ポーターを一人解雇している。気の毒に思えてもどうする事も出来ゃしない。

	太陽が照りつけるなだらかな道を辿り少し登るとグルジュンに着く。これ以上の僻地はないと思われる村の一軒しかないバッティの軒下に入り、ミルクティーを注文して飲む。とても美味しいのに驚くとランジットも頷く。持ってきた娘さんにランジットを介して話し掛けると嬉しそうに傍に来て話をする。19で名はナキナキというそうだ。と言うのは途中からランジットが直接話している訳で爺はにこにこしているしかない。しかし、出立の時、彼女と目が遭うとハッとしてしまう。目がものを言っている。そのつもりで見返しても、それでもナキナキは目を逸らさない。その目はまるで「私をここから連れ出して」と叫んでいるようだった。なんとも悲しく美しい目だった。それを無理に切って、背を向ける。後ろ髪を引かれる思いとはこれかと自問しながら一度も振り向けずにガンガンの陽の下を、唯々黙々と歩いた。 大きな建物の前に10代後半と思われる男達が地面に座って、こちらをじろじろと見る。不透明で強い眼光、長頭で鼻高、無言の緊張の中を通り過ぎる。ナキナキの隣の村だ。あの娘の目が思い出される。 次の集落では集会場のような家の廊下で祭りの準備が行われていた。子供と老人達、長らしい爺がヒンディー教の祭りだと説明してくれる。ハスタを通じて頼むと気軽に写真を撮らせてくれる。額の朱が鮮やか。 ナキナキはモンゴル系、隣はアーリヤ系、ここは東南アジア系の人達が狭い山岳地帯に混生している。きっと宗教もそうなのであろう。あげくに次の村の広場では水牛の屠殺・解体直後の現場に出くわす。 5m四方もある青のビニールの上には雨後の水溜りの様に血が淀み、それを隠すかのように掃き集める中年の女性、集会場的な大きめの家屋は全ての戸板が外され、中に20人位の裸に近い男達が背を向けて声高に作業をしている。多分肉や骨の分配なのだろう、我々に気付くと一斉にこちらを見る。その血走った目に威嚇されるように足を速める。ランジットがビニールの端に目をやり「角、水牛の角」と呟く。見れば血の海の中に大きな水牛の角が、まるで地面に元を衝けて、それだけはまだ生きているぞというように水平を保っていた。眼前が開け、遥か下方にキュムルン・コーラを望む。半ばまで降りた時、対岸にシプロンのコテージが見える。サムライの姿を見て思わず、「サムラーイッ」と大声で呼びかける。彼には助けてーと響いたかもしれない。サムライを含めてみんなが手を振るってくれる。ダンネ！
10:40	シプロン着。ハスタに案内されたコテージの食堂は窓が締め切られているので暑過ぎ、おまけに部屋中に王様、その一家の写真が所狭しと貼られていてこれからも異様な熱気を感じて逃げ出す。竹板張りの粗末なキッチン小屋の前に莫蓙を敷いて貰い、デュネス達の美味しい昼食をいただく。麦畑の緑が風に揺れ、コーラの遥か遠い下流で石灰岩の白い霧が空高く舞っている。 訳有りの親戚にあのお上は無事着けたろうか。ナキナキは今頃どうしているだろうか、次の客にあの美味しいミルクティーを入れているだろうか。
11:40	シプロン発。コテージから5分ほど前にハワイから来た白髭の爺がたった一人で発って行った。ヒマラヤは初めてというのに ABC＋プーンヒルをガイドもポーターも無しで、ぱんぱんの5OL ザックを背負ってである。ハワイでクルーザーに乗っているとのこと、ヒマラヤ焼けにしては地焼けしている筈だ。 すっごい力強さ、まるで茂暢先生、それに引き換えわが身のだらしなさ！ 何が金持ち日本人だ！唯々、弱いだけ。己が情けない、恥気性命ッ！ （番外。しかし、ハワイの後に厠に入って雲子のでかいのに驚愕。やはり、これ無くしてあれは無し。即ち何事も因果律に拠る。で一部を納得） シプロンを出て、麦穂（ハスタは麦ではないと言う、名前失念）の美しさを愛でていたのはつかの間、下って来るプルリンの白い娘達が、キャーキャー泣き叫ぶほどに急勾配、石が無く乾いた土が滑り台。ハワイの爺に負けてなるものか、おりゃあ空身なんだぁ。負け犬の遠吠えが耳に痛い。

	やっと滑り台を逆上がりして、ここはハワイかと見紛うような新築のコテージを拝み、裏山を登るとグラインダーを備えた大工の工作所があった。 ２人が仕事中だったが、振り向いた眼光の冷徹さが凄い。アンナ街道の男達とは違う、非日常の光をチョムロンからの男達は放っている。 太古を思わせる大木の下を、時々、それらの木の幹に耳を当てて水音を聞きながら登っていくと、忽然と視界が開け、そこにゆったりと草を食む馬や牛や水牛が現れた。私がその空間に少し入っても彼等は全くの無関心。のんびり草を食み、風が無く微動だにしない回りの木々の代わりに自らの尻尾を扇子のように優美に振るって体を掃いている。へたへたと座り込むと全身の汗が体から分離し、心臓の音がうるさかった。 遠くから見る石楠花はそう大きくは見えないが、傍に来てその大木ぶりに驚かされる。１０ｍ～２０ｍはあろうかと思われる大木なのだ。それが所狭しと群生している。下に入れば殆どの花は頭上遥かで幹と枝ばかりが空を遮る。森に入って花を見ずになってしまう。でも森林浴には変わりなく全身に木霊の周波が入り込み、ニッキをかいだ鼻腔みたいに痺れがまわってくる。馬鹿みたいに深呼吸をして唸っている私をハスタとランジットは嫌な顔もせず立ち止まり、じっと待っていてくれる。静かにダンネバー。
14:15	タダパニ着。石楠花が薄くなり、ざわついた人声がしてきたらコテージの並ぶ道に変わる。下がテント場になっている、建物の左側の道を通って、見晴台の所を右に曲がると HOTEL SUPER VIEW TOP＆ RESTAURANT の L 字型の建物の中央に出た。そこの南側には誰もいない白いテーブルが3個置かれ、風で飛ばされそうな座布団が各椅子に置かれていた。店の入り口の前で地面に座った老女が毛綿から糸を紡いでいる。 テーブルの１番南に座り、3時のお茶をそこで頂く。以来その場所は、夕食時、翌日の朝食時を含め、常時私の定位置となる。最初は疲れて座り込んだのだが、気付くとなかなかのビューポイントなのだ。右手はマチャプチャレを望み、中央はコテージと正対し、左手はコテージの出口を越えて村の広場の一部が見下ろせる。背後は2ｍ位低くなっている隣のコテージの広場と建物が丸見えである。 しかし、何故こんなに細かく書くのか書けるのかと言うと、それはこれから発生する事件と関係しているからである。そして、どうしても書き加えておかなければならないのは、私のテントが張られた位置である。テントは、L 字型に突き出た食道と見晴台と水洗い場、コテージのトイレとの間の狭い空間に立てられた。テントと食堂の間の間隔はわずか１ｍしかない。その通路を、村を抜ける者、食堂、トイレ、水場に来る下のテントのツアー客達、見晴台に立とうとする人々等等がひっきりなしに利用するのである。中にはテントの張りロープに足を引っ掛ける者迄いる。テントが一杯ならまだしも正面広場はがらがらで、テントは私の以外は一個も無いのである。誰もが何故こんな邪魔になるところにと思う筈である。
16:00頃	テントに入る気にもなれず、広場のテーブルで本を読んでいると賑やかだった広場や見晴台付近が急に静まり、次の瞬間、徒ならない緊張が走った。目をやると見晴台付近に、銃を構えた斥候らしい兵隊が 10 人ほど辺りを警戒しながら立っていた。村の広場にも兵隊が進出し、お土産屋台付近では緊張した人達が立ち尽くしている。暫くして、人々は落ち着きを取り戻し、逆に素知らぬ振りを装って事態を見守っているが、その間に兵隊の数はどんどん増えていく。見晴台付近で再び緊張が走る。背中に三角巾のような布袋を背負ったネパール帽の老人が、諜報らしい屈強な兵士に手荒に取り調べられている。その後も、今度はコテージの広場で華奢な青年が同じような手荒な扱いを受けている。 私の右半身に強烈な人間の存在を感じて、顔を捻ると戦闘状態と同じ没理性、没人間性、猜疑心、憎悪に血走る目をした若い兵士が、下のテラスでマチャにレンズを合せている長髪のラテン系外人に、真っ直ぐ銃口を向けている。緊張が続いた後、ラテン系がゆっくりと目前の連れの女にレンズを向け変える。その間、双方無言、無音。気付いていた者は、ふうーと息を

	ついて元の空気に合流する。人々は、危険が我が身に降りかからぬ内にと言うように次第に姿を消し始める。 わがクルーは、正面の建物の左端に併設されているキッチン小屋で夕食の支度をしているらしい。私を見通せるその入り口でランジットが辞書を開いている。ハスタは少し前から私のすぐ左側の椅子に座って日本語教則本を見ている。彼らなりに不測の事態から私を守ろうとしているのだろう。 17：00ごろ、そのことは起きた。村には続々と兵隊が増えていた。 本を読んでいた私の耳に鋭い詰問調の声が飛び込んだ。見た光景は二人の水平に銃を構えた兵隊の一人が、建物の外水道から青いポリに水を入れているシェーパに、私のテントを指差しながら目を吊り上げて詰問しているところだった。シェーパが小さく頷く、私はやはり来たなと心中思う。すると次にもう一人の兵隊が、シェーパに近づき突きつけた銃口を小刻みに振るって出口への移動を強制し始めた。彼の顔から血の気が引き、体が硬直していくのが分かる。 私は本に目を落としているハスタに「おい、あいつが困ってるぞ」という。しかし、彼はちらっと目をやった後、また日本語教則本に目を落としてしまう。三人が二、三歩歩き出した時また「いいのか、シェーパが連れていかれるぞ」と行動を促すようにいう。それでもハスタは本から目を離さない。これは一体何なのだ。自分の部下が訳もわからず強引に連行され様としているのに、首を引っ込めて亀のように、三猿を決めるハスタは。 俺には見殺しは出来ないと無意識に立ち上がった時、コテージの左側の出口付近から、大人の女性の叫ぶような声がしてきた。すぐそちらに行くと、三人の間に入って、獰猛としか言いようの無い目をした兵隊に、中年のネパール人女性が 「シェーパを連れて行くな、離してくれ」と懇願しているのだ。そう言っているのは状況、身振り語調から分かる。 私は胸が熱くなった。（その時はこの女性が、このコテージのお上とは知らなかった。1張りしか張らないキャンピングのキッチンボーイのために命がけで行動しているのだ。間違えば後々も眼をつけられるだろうに）私は二人の兵士に向かって、私が日本人で彼は私のスタッフだ と静かにはっきり言った。こんな時、相手を刺激してはいけない位は承知している。ややあって、上官らしい兵士が獰猛な方に一言、二言いうと獰猛はシェーパから銃口を外して顎を小さくしゃくった。 傍に来たシェーパに安心しろと言うように腕を掴むと彼の全身の震えが私に伝わってきた。 そして、無意識にハスタを見ると今だに背中を向けて本に目を落としている。何故なんだ、何という姿なのだ。情けなさを越えて悲しくなる。今でもあの姿は眼底から離れない。会社の服務基準なのか、理由も聞くなっていうのか。こんな時のネパール人の行動パターンなのか、でもあの女性は違う。彼独自の何か深い底を感じる。 座ったままのハスタを残し、私はキッチン小屋に行き、暫くこの中にいるようにと言い、それをランジットに訳させる。デュネス以下全員が大きく頷く。時間が経ち再び広場に平穏な空気が流れは始めた。ハスタと私は、無言のまま本に目をやっている。そう云えば彼からは一回日本語について質問があっただけで、他の会話は無い。 村の広場に通じる出口の所に日本人、外人男女数人が集まり、村の広場を談笑しながら見ている。私も背後から見ると、200人位の兵隊が、中央のテーブルに陣取った4，5人の上官を取り巻いて休んでいた。紛れも無い正真正銘の軍隊である。何故観光客の多い、こんなところに。ならマイスト集団が付近にいるのか。などと考えながら、席に戻るとふいにハスタが首を右に捻って「しぇんしえー、じっとしてろ」と低い棘のある声で言った。ぐっと来たがそれもそうと抑えて、「でもサーダー、外国人にとっては興味半分の所もあるんでは・・・」そこまで言って彼が全然聞いてないのに気付く。読んでない無言同士の読書の間、先刻の事も合せて
18:30頃	私を詰じる彼の怒りが向こうに向けたままの背中からじりじりと伝わってくる。 「でもハスタ、あれは譲れないよ、俺の生き方なのだから」と胸の中。

マチャプチャレが夕方の空に雲を巻いて立っているのを眺めながら定位置で食事を頂く。デュネスの味付けは本当に美味い、これで日本の和食（？）を食べた事が無いというのだから驚きである。殆どを平らげた時、かの SUPER VIEW のマダムが私の残り物を覗く、目が合った一瞬、互いに互いを認め合う、「お主やるね」というように。私など足元にも及ばない。あの迫力、あの勇気はきっと飛んでもなく大きな優しさがあるからだろう。久しぶりに見た＜肝っ玉母さん＞だ。ネパールも日本も世界中変わりぁしないのだ。

暗くなって仕方なくテントに入る。村の広場に軍隊がいてもこのコテージ周辺は賑わっている（他がどうかは動かないようにしていたので分からない）。だからテントにいると歩き回る足音、ロープに蹴躓く震動、見晴台でのひそひそ話、トイレを流す水音等の子守唄。果ては食堂から出て、吾が枕元での日本の奥様達の美しい文部省唱歌、いやはや己を含めての平和ボケに呆れ果て、ランジットに差し入れてもらった蝋燭（彼、キャンドルと呼ぶ、どっちでも良し）で「単一民族神話の起源」をお読みあそばす。

眠り薬の代わりに読み始めたのに、とんでもなく偉い人がとんでもなく偉くないことを言っているのに驚き、且つそれらを全然知らないでいた己に仰天。で、そいつがまた社会科の教員だったとは。言葉も無く深い反省で眠気がすっ飛ぶ。

２１：００ごろだった。尚も立て肘で読書中、「シェンシェ、起きていますか」とハスタの声、返事して開けると内張りの中に顔を出して、一気になにやら喋り出す。それが日本語らしいと気付いても意味はさっぱり分からない。顔も上気していて目も空ろ。「おい、どうした？ハスタ落ち着け、落ち着け」と言いつつ、やっと日程の事らしいと察しをつけて、中野氏から渡された栞を開き数字を示させる。それでやっと落ち着いて来て分かった事は、王様のポカラ訪問で、２８日はポカラ周辺の一切の交通機関がストップ、その結果の日程変更だった。帰れればいいのだから、ノウプロブレムだよと何回も言う。

彼はそれから付け加えて、夕方２０人近くのキッチンやポーターが軍隊に調達されたとのこと。ああ、それでこんなに動揺しているのかと内心思った。でもサーダーさっきは酔ったみたいだったよと言った途端に彼は酔ってなんかいないと怒り出す。酔ってるみたいと言ったが酔ってるとは言ってない、第一１４日にデビさんと夕食した時、君が飲めないのを見てるよと必死に言ってなだめる。（しかし、今考えるとこの時の彼の動揺・狼狽は他のクルーの連行と同時に２４日の交戦を知ったからだろう。私には最後まで言わなかったが。私は他の日本人ツアー客から聞く）

彼が去った後、暫く考え込んでしまう。最初はハスタの強気と弱気の落差の激しさ。それは好・不機嫌の差にも出るがどうも質が違うようである。前者は、事の内容認識能力と解決能力の問題、後者は感情抑制能力、そして、両方がダブってバランスを崩した時、あの激しい落差が生じるのではないか。それは彼が話してくれた幼児期の母を亡くす不幸な体験や少年期～青年期の辛苦な体験が起因しているかも知れない。

私は以後、緊急時と重要事案は自分で最終決断することにする。 そして、 まず、このテントは設置場所が不良なので緊急時には軍隊の移動、展開に邪魔になると判断。まして、ハスタは去りながら、おまけのように明日泊るティルケドゥンガのコテージで日本人客が盗難にあったから変更してウレリにすると言い置いていった。ここで日本人の金持ちテントが狙われても不思議ではない。コテージ泊りに変更する。そう決めて外に出てハスタを捜すが見つからず、ランジットに頼んだらコテージの彼方此方を捜してから、やっと村の広場の方から連れてくる。情報収集かもしれないが、サーダーがこんな状況で所在を誰にも告げてないのに不信と怒りを感じる。

	やっと1F の部屋に入り、シュラフにもぐる。意外と眠れず、朝からの状景が次々に頭に浮んでくる、特にチョムロンからの男達の眼光と表情が一様に鋭く、冷徹で無表情なのが気になる。突然、変に静まり返った外の空気を女の叫び声と二階の廊下を走る音が破る。そして男が追うけはい。それきりで、また元の闇の静けさ･･･。 それからうとうとして目覚めた時、ふっと頭に浮んできたのは、ヒマラヤの明るさと暗さである。ABC で夜中に見た怖気づくような山山の存在と同じ山山の朝からの輝く在り様は自然だけの在り様を示しているのではなく、そこに住む人々の明と暗でもあるのだ。 そして、人間にとっての明暗は昼と夜の境の無い混在としてある。自らの日常がそうであるのに、無意識にその内の暗だけを忘れようとしてヒマラヤを訪れる人々は、ここにだけ明だけの別天地を求める。自然にも人間の世界にも、そんなところは何処にも在りはしないのに。 そう思えば、ヒマラヤの人々の表情があらためてリアルに見えてくる。アンナプルナ参道の人達もそうだが、特にチョムロンからの人々の表情には堪らなくなるような切実さが滲んでいた。あのナキナキの眼差しは何故私に焼きついて離れないのか、何故大工の冷徹の眼差しが私を射抜くのか。 それは彼等が、明の中に暗を、闇を抱えているからだ。燦燦と輝く森の中に暗がりが有るように、彼等は日常の中に軍事対決を抱えている。現に私は自分の跡を僅かな時間で軍隊が迫っているとは夢にも思っていなかった。 私は動物達の束の間の桃源郷に酔い、山一面の石楠花に感嘆していたのだ。しかし、あの人達は、差し迫る危機と困難の真っ只中に生きている。 素通しのガラスから、コーラを隔てた対岸に昼間辿ってきた山山が深深とした墨色に包まれ、そのところどころに霞むような灯りが見える。ナキナキは、大工は、その他道々の人々は今寝られているのだろうか（翌日ハスタがいうには軍隊は夜中に中間にあるガンドルンに降りてい行った由）。 然し、その時もまだ私は、ヒマラヤの実態を遠くのもとして見ていた。すぐにそれは許されないものになるのだが。

タダパニから曙のマチャプチャレ

タダパニのスーパートップビューロッジ女将

2004 月 3 月 26 日 （タダパニ／ゴラパニ）	
07:20 快晴	タダパニ発。6：00にシェーパが紅茶を持ってきてくれる。心なしか彼の態度に変化を感じる。高名な高地シェルパを兄に持つ彼は、シェルパ族にしては背が高くハンサムなのだが、少しだけ気位の高いところが見えていた。それは 9 人（私は頼んだ覚えは無い！）ものサポートが無ければ登れないような金持ち（俺は違う！）の老人に対してだけにかもしれないが。その顔を見て、そうだ、SUPER マダムに礼を言わせようと直感する。なかなか二人を会わせるチャンスが無く、出発時間が迫ってきた。私はコテージの事務部屋に行き、マダムを捜すがいない。ご主人が見当違いに応対しているところに彼女が現れる。カメラを指して OK?と聞くと即座に OK のサイン、でも彼女は部屋に入っていく。戸惑っていると、彼女は首に大きな

飾りを下げながら、すぐに戻ってくる。きっと正装なのであろう。

写真を撮る前にランジットにいって待たしておいたシェーパを促すと彼はマダムの前に来て何回も嬉しそうに礼を言った。
そして、ハスタに頼んでマダムと私が撮って貰おうとするが、ズームが垂れて上手くいかない。仕方無しにランジットに代行させる（これが後まで尾を引く）。自分で、数枚撮るとマダムが送ってくれと言い、娘がコテージの名刺にe－メイルのアドレスを書いて持ってくる。それやこれやで店先は大騒ぎ。そして、出発になる。庭の出口まで来るとSUPER VIEWの ＜肝っ玉母さん＞ が夫を従えて見送りに来てくれていた。彼女は両手を胸の前で合せ、私を見て静かに「ナマステ」と言った。私は帽子をとり頭を下げながら、最大の親しみと尊敬を込めて「ダンネバード」を返す。二人にこれ以外の言葉はいらない。友よ、さらば。

軍隊の動向は、朝食の時、ハスタに聞いていた。夜中にガンドルンに移動したと言う。その軍隊がいた村の広場を足早に通り過ぎる。土産屋の屋台が道端に片付けられ、周りのコテージは半分戸が閉められたままだった。
夜中までの重い緊張が、今だに余韻として漂っている。

タダパニを出ると道は石楠花の森、次には他では余り見られなくなったヒマラヤ杉の巨木の下をなだらかに上り下りして続いていく。道に沿って流れる透明な渓流に、20m はありそうな杉の倒木が逆さに落ち込み水に浸かっている。3人は2時間ほど歩いてから、その川岸の石垣に荷物を降ろして2回目の休憩をとる。リュックを降ろすとすぐハスタは川に下りて行き、手酌で水を飲む。腹を壊すのではと言う私に大丈夫ねと一言いったきり、水を蹴飛ばしながら浅瀬を歩き回った。

森の中を歩き始めた頃の私の脳裡には、見送りに出てきてくれた SUPER VIEW マダムの姿があり、気分良くハスタの後を追っていた。しかし、私が連れて行かれた人達の安否を聞き、今朝方全員帰って来たと答えた頃から、彼は殆ど口を利かなくなった。昨夜私が出たテントで寝たら隣のコテージの外人が煩くて寝られなかったと言っていたので、寝不足によるいつもの不機嫌かと思いつつも、連行された人達の安否を聞いてからなので、気になり始めていた。そして、今彼は川の中を登山靴のまま歩き回っている。木漏れ日が水面に反射して彼の陽に焼けた顔面を照らし、精悍と云うか憤怒を抑えていると云ったらいいのか、いずれにしろ余り良い心理状態ではない表情が映し出されている。

ランジットがネパール語でハスタに何か言った時、こちらを見た彼の目に光が反射して強い力を発した。その視線は私に向けられたものではなかったが、昨日の夕方「シェンシェ、座ってろ」と言った時の目を思い出させた。一瞬にして私の気分は反転し、日陰の暗さが増していった。
ハスタはその後すぐに川から上がってきて、これから急な登りだといって私のリュックを持ち、何事も無かったように先頭に立って歩いた。右側の岩壁に燦燦と陽が当たり、時おり水面に垂れた石楠花の枝に真赤な花が咲いている。然しそれは次第に明確な映像ではなくなり、その代わりに前を行くハスタの姿がはっきりとして来た。私より小さな体に二つのリュックを巻きつけ、股関節脱臼の後遺症らしい多少アンバランスな歩行をするその姿が次第に私の心に重く圧し掛かって来た。そうだ、私はこの子の側に立って昨日の事を考えた事があるのか、昨日のような軍隊との遭遇なんかきっと初めてのことだろう。三猿にしても体が動かないほど緊張しただけなのかもしれない。いや、もしかしたらハスタは私を守ろうとしていたのかも知れない。あの狼狽振りも仕方ない事ではないのか。

日陰を歩いても汗が吹き出る急登の途中で、5人ほどのポーターに混じって、男並みの荷を背負ったシェルパニが私を追い越して行く。小柄な体を和服に似た鮮やかな着物に包み、明るくナマステを云ってくれる。そして、急登がやっと終わりかけた崖下の岩屋で煙が立ってい

10:10	るので見ると、追い越していったポーター達が休憩し、驚いたことにあの若いシェルパニが、かいがいしく食事の支度をしているではないか。女は強いななんていう決まり文句など吹っ飛んで、ただ呆然とし、温かい感情湧出に身を委ねたまま、その情景を味わっていた。まるでアンナさまが、高山病のように追いかけて来てくれたようだ。 デオラリ着。ぱっと出たコテージの庭テラスには真夏のような太陽が照りつけ、休んでいる数人はげんなりとしていた。すぐサムライがキッチンから飛び出して迎えてくれ、シェーパが冷たいジュースを差し出す。これでは誰が見ても金持ちの日本の爺に違いない。 そのげんなり組の中に、チョモロンでアンナサウスを眺めながらテラスで一緒に朝食をした、30前後の白人夫婦（？）がいた。これまでも何回も追い越されたが彼等の長い休憩の間に追いつくということを繰り返していた。女性は、180cmは優にあろうと思われる白い長身にいつもノースリープの上着を着、長い脚を一層ながーく見せるショートパンツをはいていた。顔は、大きな鷲鼻にでかい濃紺のサングラスを掛けていたので良く分からない。夫と思われる男性は欧米人特有の若禿げが進行中で彼女と同じく黒っぽいサングラスを常用していた。不思議な事に彼等が最初に目に入る時はいつもいつも読書している姿である。チョムロン、ナキナキのバッティ、シプロン、タダパニ、バンタンティ、そして今、本を片手に一言二言の場面は記憶にあるが、本を持たずに話している姿は思い出せない。旅行中の欧米人が読書しているのは良く見る光景だが、これほどの読書好きは初めてである。自然には目もくれず、周りの人間達には一瞥もない二人は一体何をしにきたのか、まさかヒマラヤが図書館代わりでもないだろうに。 彼女達が読書しながらお茶してる間にわがキッチン班は、早めの昼食を出してくれた。明暗混在の気分と暑さで食が進まずにいるとバララムが笛を吹き出し、彼女達のガイドとポーターも加わってテラスは真夏のお祭りの賑わい。暫くして、奥の席にいた二人が急に立ち上がると私の前を通って歩き出した。男はそれまでの追い越しと違って素知らぬ振りで行き、追うようにして付いて来た彼女はふいにサングラスを取って会釈した。私は反射的に合掌し、小声でナマステと言った。この時が彼女の素顔を見た最初で最後である。一体何故サングラスを取って会釈したのか、私も何故小さな声でナマステを言ったのかさっぱり解らない。ややあって、日本人団体客が到着したのをきっかけに我々も出発したのだが、それきり二人にはゴラパニでもナヤプルへの道中でも会わなくなってしまった。そして、後日ポカラ空港で同じような
11:10	カップルを見た時、タダパニの闇夜に消えた女生の叫び声と追いかける男のけはいはあの二人のような気がしてならなかった。ヒマラヤは訪れる人々の明と暗まで演出しているのだろうか。 デオラリ発。出発寸前、アンナ様が追ってきたようなシェルパニが到着、そこに居合わせたサムライと一緒に写真を撮ろうとするとみんながやんやの喝采、すると流石のサムライ、乗って彼女の肩を抱く。どっとくる人達と何が起きたか分からないままぽかんとする人達を明るい光線が包み込んでいる。 道は木陰に入り、嘘のようななだらかなさで続く。ハスタ、ランジットと日本語ごっこをしながら歩くうち、右側の木立が切れ、その間遥かに雪山が浮んでいる。懐かしのサウスそして初めて見るニルギリが赤い石楠花を引き立たせるように二枚の三角錐で立っている。するとまた木立、でも気付けばそれが満開の石楠花のトンネル、どこからも目が離せず何かに躓きながらおろおろとランジットの後を追う。 痩せ尾根が切れて一望の平地に出る。左には山一面の石楠花が午後の日を浴びてサンゴ礁のように燃えている。そしてハスタが指差す方角にプーンヒルの見晴台、そのまま目を流してなだらかな大低山を目で追うととんでもなく大きな台形が迫上がり、そのはるか高みで雲が強引に巻かれている。ハスタあの雲のところがダウラギリ？と聞くとシェンシェごめん天気悪くて、と気の毒そうに繰り返す。

	４，５人の男が寝ているチョウタラで、無くなった手持ちのヒィルムを補充するためにザックの鍵を開けようとすると壊れて開かない、困って石で壊していると寝ていた男達が集まって座り、私の手元を誰も口を利かず疲れきった顔をしてぼんやりと見ている。ヒィルムと一緒に出てきたキャンディを一人づつ配ると無言で受け取り口に運ぶ、一人の男はまだ寝ているので開いた手に載せると握り締めてそのまま寝ている。また一人は壊れた鍵を子供のようにいじり、それを他の男がぽかんと眺めていた。吹き抜ける風に、近くに立っている竹のバッティ小屋から聞こえてくる雑音ばかりのラジオの音が流されていく。 しばらくすると男の一人がハスタに何事かをいい。皆一斉に石畳を音も無く降り、６０～８０kgはあるだろう荷物籠を背負ってゴラパニへの道にかぶさるサンゴの森に消えていった。ハスタが問わず語りに彼等も昨夜連れて行かれたポーター達だと言った。ランジットも私も無言のまま、目で追うのが精一杯だった。彼等の尋常でない疲れが移ったのか下りなのに足が重く、ハスタの奇声もランジットの歌も私の講義も無くとぼとぼと森の中を辿った。 村人達だけでなくヒマラヤで働く人達にも明暗の混在が如実なのだった。
14:30	ゴラパニ村着。NEC中野氏の栞にガラパニ村とあるように林が切れると左手には建築中の大きな建物、下ってすぐにハワイにでもありそうな一戸建てのコテージ、敷き詰めた芝に白のテーブル、柄の良くないアメリカ娘風白人娘が３人、ショウトパンツから剥き出しの脚をぶん投げて、コーラのラッパ飲み、いやはや恐れ入ります。広場代わりの運動場で他のコスモのコックが大勢さんとバレーに興じている。村の中央を一気に上がり、村が見下ろせる丘の上に出る。見渡せば右からタダパニに続く痩せ尾根、ヒュンチュリ、サウスの山容が競うように長々とカリ・ガンダキに落ち込み、霞む彼方に巨大な台形が空中にドーンと雲を巻き揚げている。ニルギリはあくまで独立を主張して高貴に聳えていた。 雄大な景観に見惚れているとすぐ後でランジット達がテントの設営、えっと驚く。こんな素晴らしい見晴台にという意味とこんな風通しの良い土埃の原っぱにという意味でである。足元から下を見下ろせば、階段状にテント場があり外人のテントや他のコスモのテントが張られていく。風になったらきついものがあるのではと思ったが、毎日文句もつけられず、覚悟を決める。 ３時のお茶は、シェーパが離れているコテージから運んでくれた長椅子に座って頂く。世界中でこんなに素晴らしい喫茶台はありません。しかし、しばらくするとこの道がプーンヒルへの道であることが判明。おまけにこの上にもう一軒大きなコテージがあった。道理でたくさんの色んな人がお通りなさる訳である。薪を担いだ老人、何処に何をしに行くのか知らない幼い姉妹、派手な衣装の娘達、天秤量りのトマト売り、片言の日本語で話し掛けて来る痩せた青年、じろじろ見つめる白頭巾の中年女性、お土産いりませんかと聞く夫婦者、興味と蔑視を向ける上のコテージの欧米人達、日暮れまでに何人の人間が通った事だろう。 それはそれで単なる私にとっては楽しく興味深いものなのだが、金持ち日本人としての私にとっては夜が心細くなる次第。夕食を遠いコテージの食堂で（肩身を狭めて）するよりは、莫蓙をここに敷いて頂くと言ったら力持ちのシェーパは食堂のテーブルと椅子を担いで来て、これも世界のどこを探してもない絶景付き食卓を私のために設営してくれた。あれからの彼の献身にはほとほと頭が下るが、金持ち日本人がより際立つことになるのは致し方ない。しかし、これはシェーパの折角の謝意、素直に覚悟を決めて一生一度の役を演じさせて貰う。 サウスが夕日に赤く染まってもダウラギリは雲との絡みに忙しく、幾ら待ってもチン位しかいかずチンチンでもと願っている僕をとうとう焦らせたまま幕を降ろしてしまった。 平地の隅にあるここで寝るのかと気の毒になるキッチン小屋に行き、長い夜になりそうな今夜のためにランジットからキャンドルを貰う。そして、足元に何人もの足音と話し声を聞きながら、小野英二の、昔の偉いさん今の偉いさん自身の書き物に語らせるやり方の賢こさに甚く

	感服しながら分厚い著作を繙く。 9時ごろからだったか、それまではたはたとしていた風がばたばたとなり、キャンドルの灯が揺れて火災の危険を感じ、慌てて吹き消したのは。 それから2時間近く、ある時はテントごとハンググライダ−のようにカリガンダキニに舞落ちていくのではないかと、またある時は吹き付ける土埃がびしびしとテントを突き、何時かテントに穴を開けて侵入して来はしないかと、身支度を整えてカヌーに乗る人よろしく脚をしっかりとシュラフに入れテントカヌーに乗っていた。どうなろうと覚悟の上である。デビ！ 12時ごろ、地形的に予想されたさしもの気流移動もやっと静まり、外に出ると、コテージの建物の裏に電球が点灯され、反対側のキッチン小屋には青白いガス灯がコウコウと輝き、小屋周辺を白日のように浮び上がらせていた。それは金持ち日本人に誘惑された人に対する防御対策以外に考えられない光景である。これはランドルン以来のこと、やはりなと納得。戸板も無く吹き抜けの小屋に近づけば、白日の下眩しさで歪んだ寝顔が苦しそうに鼾を掻いている。ハスタをはじめの吾がクルー達。 その後、ぐらっとしたら目覚ましの音、もう朝4時を知らせてくれる。

2004 月 3 月 27 日 （ゴラパニ／プーンヒル／ゴラパニ／ウレリ）	
04:40 薄曇	プーンヒルへ出発。4時にはサムライ達が起きだし、火をいれる。そしていつものように紅茶の目覚まし、何と温かい飲み物であろうか。人の誠意が五臓六腑に染み渡るとはこのことなのだ。 ハスタ、ランジットに私の三人を皆が送ってくれる。村や下のテントに灯がつき、人のざわめきが冷たい空気に混じる。懐中電灯で足元を照らしハスタはいつもの安定した歩調で私を誘導する。 やっとあたり一面が薄い群青色になり始めた頃、私たちは誰もいない見晴らしの丘に立ち、展望台に登った。 カリ・ガンダキから吹き上げる風は体を揺らしさすがに冷たい。青さを増す空は見渡せるもののマチャもサウスも雲と同じ色、ましてダウラは雲の上の雲、集まってきた人達と手を揉みながら朝明けを待つ。草株に座っていごかない私を二人は離れて見守りながら、ハスタが時々やってきて天気悪いごめんねを繰り返す。今朝は彼がやけに優しい。殆どの人が諦めて降りていった後も7時半まで大丈夫と言って未練がましいわたしを待ってくれる。 とうとうアンナ連山もダウラもすっきりとは姿を見せず部分チンチンをしてくれただけ、私がチンを言っても二人は気の毒がってか乗ってこない、こんな時はやはり山の天気には勝てないよという決まり文句が一番当り障りがないようだ。8時にテント帰着、やはりシェーパ特設の食卓で朝食を頂く。
09:00	ゴラパニ出発。王様の関係で、ナヤプルまでに二泊する事になり私のビスターリが加速する。村の中央の十字路で、苦い顔をした中年男が三人何やらの署名と募金活動、何時に無くご機嫌のハスタがその男たちに代わって趣旨説明、それによるとこの村以外の大資本が巨大コテージを建設中、在来の中小が食えなくなるので反対している由、そう云えば村の入り口に工事中の大きな建造物があった。 これ以上ヤンキー娘（何人でも）に荒らされたくないので、金持ち日本人として200R を献上、署名する。それでも中年男たち不服面でにこりともせず。ハスタ気にしてか盛んにネパールの将来を弁ずる。これまでの道中でもそうだが、彼の考え方は総じて否定的であり、特に自国の政治、経済に対しての悲観的な見方は気の毒になるくらいである。それを彼の日本語で言うのだから「・・・・だめね」、「わるい・・・ね」、「・・は・・・よりわるい」「・・・はよくない」等の表現ばかりになり、一層暗く聞こえるのかもしれない。最後には、ついこちらの方が「でも希望を

	もってやらないといけないのでは」などと曖昧な言葉を返すことになる。逆に云えば彼はそれだけ国を憂える気持が高いといえるのかも知れないが。 いつの間にか他のコスモツアーに抜かれる、タダパニからすれ違いをやっているがスタッフ同士の交流に比べ、一人旅、気位の高い爺に反感を覚えてか客同士は素知らぬ振り。そんな事は関係なく全日本人の頭上は赤、紅、桃の鮮やかなゴラパニ石楠花の満開、日に照らされた花々の一片づつが光を呼んで己の色素を発色させている。その透明の色の鮮やかさは羨ましい限り。それにしても自然は何故これほどの美しさをこんな巨木に与え、この地に群生させたのか呆れるばかりの石楠花公園である。 上ばかり見て歩いていたら、小声のナマステが聞こえた。私の前に5，6歳の女の子が手を合せていた。そして後に7，8歳に見える姉らしい子が無言、無挙手で控えている。私はランジットが担いでいるザックに鉛筆が入っているのを思い出し、防水用の袋からザックを取り出し、鉛筆とボールペンにキャンディを付けて差し出した。姉妹は無表情に受け取り、姉がダンネと小声で礼を云って立ち去った。こんな時、ハスタとランジットは決して面倒がらず、私を批判もせず、一言二言子供に声を掛けて助けてくれる。物をやるな、自立心が損なわれると非難があるが、本当に貧しくなければ恥を忍んで手を出しはしないし、貰ったからと言って自立心がなくなるほど子供の心の力は軟ではないと自らの経験から確信している。 事実この村は観光地化しているだけあって全体に他の部落より豊かで手を出す子供は殆どいない、逆に出す子は出さざるを得ない背景を持っているのだろう。あの二人は恥じらいで顔を強張らせていた。あの姉妹があの鉛筆で20個の単語を書いてくれれば、同じ境遇にあった髪の長い日本の爺は本望である。 子供における明暗の混在を明るい石楠花の下で見るのは辛いことである。 三人は、ご機嫌で日本語ごっこをやりながらブラブラと言っていいほどのビスターリで下りながら、5、6頭づつに分かれた30頭ぐらいのロバ隊をやり過ごす。抜かれたコスモツアーの一行はロバを恐れて、広めの道端に待機している。この頃からいつも一行の一番後ろを行く三人と目で挨拶をする様になった。三人にサインを送って抜き返す。しばらく下るとナヤタンテイの小沢の淵に出て、そこに立っている小屋建てのバッティで休む。中で美味いミルクティーを飲んでいるとまたコスモ隊が軒下を抜けていく、窓から見ているとしんがり三人の内年配のご婦人が、お達者ですね、お幾つですかとお声を掛けて下さる、久しぶりの正調日本語に思わず、百八歳ですと軽口を叩く、ご一同はお笑いくださって進まれたが、この思わず飛び出た百八歳が何故なのか、内心をちくちくと突き続ける。
12:15	バンタンティ着。下が一気に落ちている見晴らしの良いテラスに昼食がセットされ私を待っている。座るとシェーパが水の入った洗面器とタオルをうやうやしく運んで来て私を促す。そしてサムライがにこにこと食事を運び、デュネスがコックとして給仕してくれる。これはカンチェンジュンを始め、すべてのヒマラヤ・キャンピング・スタイルなのだが、たった一人の客が7人～9人のスタッフを引き連れての同じ光景は別物、異様に映るらしく（当たり前）欧米人を含めた5、6人の人間達がしぇんしぇいこと異邦人！の豪勢なお食事を、話の種にでもなさるのか恥も外聞も忘れて最初から最後までご観察になっている。スターってこんなものか！それにしても恥を知るロン毛の爺には疲れることこの上なし。 早々に切り上げたので、バララムが怪訝そうな目で私を見るので美味しかったけど食欲が無いのだとランジットに告げてもらう。これには嘘は無い。殆ど寝てないのとビスターリにしろ4時半からの活動が老体を鞭打ち状態にしているのだろう、食事を終えて座っていると眠気が襲ってくる。 1時出立。 バンタンティを出て、たった一軒のバッティでランジットがヒィルムを見つけてくれた。ASA　20

	0　36枚　250R　藁をも掴むで購入。ついでにバッティにいた人達と写真を撮って貰おうとハスタに頼む。ハスタはレンズを下に向けて振るのでズームになってしまい上手くいかない。一、二度説明したが分からず同じことの繰り返し、皆待っているのでランジットに頼む。その時は何事も無く、バッティに別れを告げて歩き出した。ランジットとヒィルムの値段がどうのと話しているとハスタが急に怒り出し、「もう二度と先生のカメラは撮らない」と云う。 ずっと上機嫌で来たし、冗談も言い合ってきたので、「サーダー、カメラ位でそんなに怒るなよ」と私が云った瞬間、前を歩いていた彼が急に止まり、体を横に曲げて物凄い目付きで睨みあげ、「しぇんしえっ、俺をサーダーと呼ぶのは止めてくれ、山の仕事はプーンヒルで終わったね」強い口調で言う。私は意味が分からず、ランジットもぽかんとしているとさっさと歩き出してしまう。仕方なく付いていきながら、「でもさあ、客がいてスタッフがいれば、そのリーダーをサーダーって呼ぶんじゃないの？」と和やかに言うと、また振り向きざま、「客が一人しかいないサーダーなんて、他のサーダーや仲間に恥ずかしくてしょうがないんだ」と言い放った。 いろいろ我慢してご機嫌をとってきたがここに至って私もぶち切れ、「何っ？客が一人じゃあ恥ずかしいだと！客が一人だろうが、十人だろうが、客の命にぁ変わりはないっ。第一　コスモはパンフでお前をサーダーと紹介している。プーンヒルで山の仕事は終わったって？何を勝手なこと言ってんだ、客にとって山が終わるっていうのは、お前が迎えに来たホテルの玄関だ。それじゃあ、今のお前は一体何なのだ、今後は誰が責任者なんだ。俺はお前に2週間も恥をかかせて来たと言うのか、嫌ならもっと早くフランクに言えばいいではないか。一番いけないのは、私情を仕事に持ち込むことことだ。この仕事が嫌なら、初めから断れッ」等々を思わず捲くし立てた。 するとハスタは私の剣幕に驚いてか手の平反して平謝り、私の手を握り、身を縮めて「しぇんしぇ、ごめんなさい」ばかりを繰り返す。分かればいいのだからと何回言っても聞き分けず、肩を抑えてやっと止める。何処にあの啖呵の元があるのか、そして急転の、この萎れた態度は一体何なのか。日常些細な事にも、時々見せていた強弱、躁鬱、快不快、明暗の激変が爆発。 私の内心は何に対してなのかも知れず、何故か無性に悲しくなる。 脇でランジットが呆然としているのが目に入る。そして、ちょうどデュネス達が我々に追いついたところなのでハスタとのやり取りを見てしまったようだ。 日本語が少し分かるデュネスに先に行くように促し、心配させないように「もう大丈夫、仲良くなり過ぎたんだ」と自分に言うような事を言った。5人は緊張した面持ちで道の端を追い越していく。三人は無言で彼らの後を追う。 日本人が盗難にあったティルケドゥンガを避けて、タダパニで急にウレリに変更した所為なのか、先行したディネス達は今夜キャンプするコテージが分からず、村の入り口でぽつねんと待機していた。ハスタがディネスと相談し、一軒のコテージに交渉するが断られ、少し下って別のコテージの前でここにしようという。見れば流行らない事歴然の薄汚れた建物、テント場は路に沿った狭いところ、おまけに家族らしい数人がじろじろ品定めをする様に一行を見ている。まったくの一元さん扱い、今までにこの村は利用した事が無いのかも知れない。もしそうなら理由が分かるような気がする。何故なら、村の雰囲気が見るからに荒れ、寂れているからだ。
14:00	ハスタとデュネス、いやスタッフ全員が見るともなしに私を見るので、先刻のこともあり、私は気持を決めて自分の意見を言った。そして、もっと下に行って他を探してくれと頼んだ。デュネスとサムライが駆けるように先行する。後のスタッフがそれに従う。その時私は、昼食後、石段の下りでハスタに持ってもらった自分のリュックを自分で担いでるのを知った。ハスタ激発の場からなのだ。

	ウレリのはずれ（最南端） ANNAPURUNA VIEW 着 石に蹴躓けば谷に転げ落ちそうな急勾配を降りて行くと、たった一軒だが見るからに掃除の行き届いた庭と鉢の花が置かれた食堂の前で、デュネスが待っていた。彼は自信ありげに私をコテージに案内した。母屋1階中央の開閉戸付きの廊下を抜けてキャンピング場に出てその設定と清潔さに驚かされた。 L字に曲がる路に沿い、建物をほぼそれの合せてL字型に立ててあるので、路からテント場には中央の通路を通ってしか入れず、テント場の前後は急勾配の傾斜地、奥はキッチン小屋で塞いで、殆ど侵入困難。そして、キッチン小屋の中を覗いて驚く、その中が清潔なのは勿論スタッフ用の板の間が作られていた。今までとんでもなく劣悪な施設しか見ていなかったのでこの配慮にはほんとうに感動した。テント場の芝生は丁寧に刈り込まれ、テント客用のトイレも清潔そのもの。まったく非の打ち所の無いテント場である。 デュネスにテント場の素晴らしさを言う。彼も言葉を助けているランジットも私の指摘にいちいち頷いている。私は二人にそう言いながらも、内心では今夜テントか部屋かで迷っていた。二人が位置を決めてくれと言った時、私は熟睡の誘惑に勝てず、昨夜寝てないので部屋にすると言ってしまった。 50過ぎに見えるお上に案内されて二階のはずれの部屋に入る。建物始め全てが使い古されているのに、清潔で整理整頓されている。部屋もそうである。シーツ、枕カバーは無論、カーテンにも敷かれたカーペットにも沁みや埃が無く、ベッドの下にはスリッパが揃えてある。そして廊下の洗濯物用の紐には幾つもの洗濯バサミ、これには再び感動してしまう。全てに人の手と心を感じる。このコテージの主を見てみたい。 すぐにランジットが荷物を担いで入ってくる。いつものようにシュラフを広げている。言い訳がましく昨夜の強風を言うと、あの時何度も先生のテントをみにいこうと思ったのですがと言う、じゃあ君も眠いねと言葉を濁す。 窓から外を見ると、キッチン小屋の脇にある水場でサムライやシェーパが豊かな水量の水でからだを洗っている。ポーターのリンジ・シェルパが一人外れて、芝の上に大きな体を投げ出している。ポーターは彼だけなのだ。 部屋の戸口で大きな声がしているのに気付き戸を開けると、洗面器を持ったシェーパが怪訝そうな表情で立っていた。きっと何回も声を掛けたのだろう、私はぐっすり寝ていたようだ。彼の案内で食堂に入り、お茶を頂く。古いらしいがネパール語、英語の雑誌が何冊か置かれ、出窓には色鮮やかな花瓶があちこちに置かれていた。他には客がいず、久しぶりに誰の目も気にせずにココアを飲んだ。綺麗な窓ガラスを通して、窓下に遠くダラウンテイ・コーラが走り、右前方に大きく開けていた景色が横たわっている、ナヤプル方面、そして、ポカラだ。そろそろこの旅も終わりに近づいているなと胸中で呟く。
18:00	再び目を左下に戻したら、二つのツアーが一つはヒレに、他はティルケドゥンガに蟻のように近づいて行く。どちらかがコスモだろう。 夕食を明るい食堂で頂くのは往きのバンブー以来、本当に久しぶりである。ほーッとする気分が加わって、余計美味しさを増した食事をゆっくりと頂き殆んどを平らげた。 食堂を出ると夕闇が谷から上がりすでに山の姿を濃紺一色にしているが、上空にはまだ少し明るみが残っていた。部屋への廊下の突き当たりは建てかけの2階の床部分で、コンクリートのままテラス状になっている。そこに座り、サムライがポットに入れてくれたタトバニ（お湯）を、ちびちびと飲む。

流石にバララムも今夜は昼の事で気分が乗らないのか、或いは場所によっては控えるようなので、キッチン小屋から笛の音が聞こえてこない。焼畑の火が竜のように浮かび上がり、山を斜線で輪切るように家々の赤っぽい電燈が連なっている。夕食前後にハスタと会ったが、数時間前が嘘のように明るく振舞っている。皆に心配かけないようにサーダーらしくしているのだなと思いつつも、突然の変化を味わっているので安堵感が湧いてこない。じっくり彼のことを考えようとするが、タダパニ以来常に彼の顔がちらついて何処かに拒むものがある。いったいヒマラヤの、アンナプルナの、あの感激と感動は何処へ消えてしまったのだ。ミュージシャンや高知大生、ヤンキー、ナキナキ、肝っ玉母さんたちは幻だったのか。突如現れた軍隊が全てを消し去ってしまったというのか。

電燈をつけたまま私は寝てしまい、夜中に目覚める。アンナー帯のトイレのやり方はまったく同じなのに清潔さはまったく違う。オーナーによってこれほども違うものなのだ。部屋に戻り電燈を消してシュラフに入る。もう眠れる筈も無く、カーテンを開けると対岸の闇の山に灯りが点在し、全体がぼんやりと映し出されている。この光景は見たことがあると思ったとき、タダパニのコテージの窓からみた光景が重なった。

あの時、私は何を見たのか、チョムロンからの人々の明暗の混在、その中で生きている人々の事ではなかったのか、そしてそれもアンナの女神・観音様が設けた出会いなのだと、それに加えて渓谷に入り水を蹴飛ばすハスタに、遠くで見る出会いだけでなく、まったくの至近距離で個人が明暗を抱え、足掻いている人間との出会いが来るのを予感したのではなかったか。昼間あった事は軍隊との遭遇という非日常的な事ではなく、彼の本質が一番表出する日常での出会いなのではないのか。そこまでを辿りながらも、心底の声が収まらず反って声高になってくるのを抑えられない。
焼きついて離れないのは生き方として理解できない三猿の姿だし、日常・非日常に共通するあの血走った憎悪の眼光である、詰り、ハスタは、彼にとっては日常・非日常などというそんな甘い分類なんか関係のない闇を抱えて生きているのだ。そう見る方が彼を丸ごと見ることに繋がるのではないのか、出会いはなにも良いとこ出会いだけではなく、あの夜中の怖気づくような山山との出会いと同じ闇との出会いも有りなのだ。そして彼が何であるのかではなく、彼とどう対峙するのかでもなく、どう付き合うことができるのか、そのまま丸ごと受け入れられるのか。それが私に問われているのかもしれない。

わが観音様はアンナの旅の終末に深いクレパスとも言える出会いをお置きになられたようだ。そりゃそうだ、観音様も夜は怖気づくアンナ連山の仲間なのだから、ご自身が明暗の混在でいらっしゃって少しも不思議は無く、故にご配慮深く、私が挫けないように無学歴、誠心、聡明なランジットと文盲、誠意、天涯孤独のサムライを介添えとしてお付け下さった。（やるー・・・参ったなー、もう）
そこまででもう限界だった。次第に眠りに引き込まれながら思い浮かんだのは、明朝出発の時、ハスタに私のリュックを持って貰うことであった。

ウレリのロッジの孫娘

ウレリのロッジからアンナプルナサウス

2004 年 3 月 28 日 （ウレリ／ビレタンティ）	
07:30 晴れ	ウレリというより ANNAPURNA VIEW 出発。 どんな朝でも5時半頃には目覚めてしまう。窓から目覚めていくダラウンテイ・コーラと段々畑をぼんやり眺めているといつものようにシェーパが紅茶を持ってきてくれる。彼が何か言いたそうに手招きするので、紅茶を持ったままコンクートの屋根テラスに出ると、頭上遥かに、なんと朝日に輝く、どでかいサウスがどーんとあるではないか！ それもチョムロンから見たサウスなのだ。ゴラパニからの流れるサウスではなく、見納めと念じて脳裡に叩き込んだ重量感あふれるサウスがそこにあった。テイルケドウンガから左に迫あがる両側の山が合わさるところだが、そこは昨日午後一杯雲が掛かっていたのだ。 いつシェーパがいなくなったかも知らず、カップを持ったまま呆然と見ていた。私は一気にアンナプルナ内院へ引き戻された。あの二日間のすべての映像と感動が怒涛のように甦り、訳有りの胸から、ついでに目からも涙があふれ出た。 なんという女神の贈り物なのだろう！なんという優しさなのだ！ その時、いつかのランジットの声に似て、サムライが「しぇんしぇ」と静かに声を掛け食堂を指差した。 食後、私はどうしてもここの主を見たかったので、お上のいるコテージのキッチンに行った。そこには奥の釜戸で火を使っているお上と、低い箱に向かい合って座り、対話している50がらみと70がらみの二人の男がいた。そして、孫娘が三人の間で遊んでいた。私は左側の50がらみの男を見た時、彼がここの主に違いないと思った。食堂に飾られていた二枚の写真から直感したのだ。一枚はカトマンドウかデリーでの観閲式の集合写真、他は若い時の彼とお上の写真である。かつての精悍さを年輪で包み、力のある柔和な目がこちらに向けられている。写真を頼むと彼は他の人を集めて被写体になってくれた。このコテージとテント場の設営は彼、清潔さはお上なのだろう。彼が何故村はずれのこの場所にたった一軒のコテージを建てたのか、それは ANNAPURNA VIEW だからだ。看板に偽りなし、このコテージは全てが本物だった。 出かける間際になってハスタに会う。いつも寝起きの悪い彼だが、今朝は特に調子が出ない様子である。やはり彼も寝られなかったに違いない。一方の私はサウスのお陰で俄か元気でご機嫌、この落差。 7時半、三人は、コテージの前の石垣に置いていた各自の荷物を背負った。 リュックのベルトを締めているとハスタが来て、「しぇんしぇい、坂急ね」と言いながらリュックをよこせという仕草をした。私は「うん、もう大丈夫、昨日この坂下ったけど膝痛くならなかった」とうっかり本音を言ってしまった。彼は一瞬戸惑った顔をし、手を引っ込めた。私は、昨夜決めたことをはっきり思い出して慌てたが、何故かリュックを渡さず、同じ言葉を繰り返した。「昨日、この坂下ったけど膝は痛くならなかった」「コスモのおばちゃん達に百八じゃないところを見せなくちゃ」等と、しかし、もうそれは自分にも言い訳に聞こえた。おまけに、私は歩き出してしまった。 それで決まりだった。内心では、渡せ、持ってもらえ、それが最善なのだ、昨日の事を許した事になるのだと言いながら、何故か脚は若いランジットの足跡を追っていた。 ハスタはそれ以降、マタンティ手前の崖崩れの川原でランジットが道を探しあぐねた時以外二度と私の前を歩くことはなかった。 口をきかず、私の3m位後を付いてくるハスタに何度か話しけたが生返事ばかり、ビレタンティのコテージの前で盗難はここかと聞いてもあっちと指差すだけで鬱を変えてはくれなかった。今までとは違い私の所為での鬱なので、こちらも落ち込んでしまいそうだったが必死に食い止めようとした。

	アンナが消えてしまうのはやり切れない。何でこんなに気を使わなければならないのか、どっちが客だか知れやしねぇ、勝手にしろと田圃道を大声で演歌を歌いながら歩いた。その時、自分が友達感覚で腹を立てているのに気付いておかしかった。やはり「仲良く成り過ぎた」のかと。前に書いたヤンキー青年とはこんな時に出会ったのだ。ランジットに髪の毛のことを言うと、ハスタはその時だけ私に近づき興味深そうにヤンキーの意味を聞き、手帳に書き止めていた。私は興味を持つ理由を聞かなかったが、シプロンからの登りで見た落書きを思い出させ、「ヤンキー、ゴウ　ホームとは違うよ」とだけ言って置いた。
10:10	太陽の光はドンドン強くなり、川も、川原の水牛も泥んこの道もバナナの葉もゆらゆらと陽炎みたいに霞んで見えた。ランジットも察してか殆んど無言、三人で黙々と歩くのにほとほと飽きたころ、暑さでぐったりした人々ばかりの静寂の村、マタンティに入った。 村外れのコテージ（？）の屋根つきテラスに入り、吹き出た汗を拭い、汗を絞ったチョッキを軒下に吊るす。そこに私を残し、みんなはキッチン小屋があるらしい建物の裏側に行く。南国を思わせる植物が強い光線を弾いて小屋を建てられるのかと思うほど鬱蒼としている。バッティでもあるらしく代わる代わる村人が買いものに来る。やはり私に興味を持つが一瞬だけで後は自分達の世界に移る。そこへコスモツアーが通りがかり、いつもの方が「今日はお幾つですか」とお声を掛けてくださる。「89歳になりました」とお答えする。「ハスタ、やはり本音なんだよ。でも、もう遅いよな」と独り言。暑いせいか、「まっ　いいか」が継いで出る。どっちにしろどうでもいいことだ。 確か11時前に昼食になるが、暑さもあって食欲なし。折角の料理を半分も頂けない謝りをランジットに伝えて貰う。 ハスタが来て、落ち着いた態度で日程の再変更を確認する。 MBC　泊の省略でポカラ1泊とカトマンドゥ1泊になったのを、王様訪ポカでカト泊無しになっていたが、ポカ泊をカト泊に換えてくれと言うもの、天候不良に拠る飛行中止を経験しているのと何時またドンパチが発生するか判らず、ポカ泊無しで早くカトに帰りたいとせっつく。ハスタは素直にわかった、ビレタンティでコスモに電話すると答える。 その後、私はテラス付近で数枚の写真を撮り、元の場所に戻って座っていると村人のネパール語が気持良く、しばらくの間うとうとしてしまう。 ランジットが来て出発だと言う。テラスから出てリュックを背負うとハスタも裏から支度をして出てきた。一緒に出かけるものと思っていると、ハスタが「先ね、電話ね」と笑いなが言い、デユネスと先に出発してしまった。かんかん照りの陽光の中を我慢していた大股で、彼はさっそうと歩いていった。まるで何かをふっ切るように。 続いてランジットと出発し、むせ返るような新緑の中をのんびり歩いているとすぐに元気なスタッフに抜かれる。ハスタも同じかも知れないが、私はなんだか清々した気分になり、栞にあるビレタンティまでの60分を楽しんで歩くことにする。「カンチェンジュンガの時みたいだね」と前を行くランジットに声を掛けると「はい」という明るい答えが返ってきた。 そして、ランジットの「先生、先生」の呼び掛けから始まる日本語教室が再開された。旅の始めの頃は彼も皆と同じように「しぇんしぇい」に近かったが、今ではもう私の耳に「せんせい」とはっきり聞こえる。単語一つの意味から始まって、同音異義、熟語の用法など驚くほどの、と言うよりこちらが答えに困るほどの質問なのである。答えの中から延長してまた質問、それは社会・理科用語に及び小学校も行ってない彼の知識への渇望がひしひしと伝わってきて、元教員の端くれは身の引き締まる思いと同時に教える事の喜びを噛みしめる。一例を書いておけば、日本のお客さんが良く使う体験と経験は同じなのか違うのか、違うのならどう違うのかという具合である。

	呆け防止に最高の頭脳労働をしている内、川は河になり、今は大きな渓谷に変わっていた。ゆっくりとカーブした道が角を曲がるとぱっと視界が開けて河は幅を広げて所々に透明な水を湛えた淵をつくっていた。そこから子供達の弾ける声が中腹の道まで賑やかに聞こえて来る。ズームを覗くと褐色の少年少女が飛び魚のように水飛沫の中を舞っていた。 左手断崖の上にちらほらとコテージらしい家並みが見え始めビレタンティが近づいたことが分かる。崖下には家族連れをはじめ、トレックの外人客男女が水浴・洗濯でこちらも大賑わい。カトマンドウにやっと残っているような古いが立派な建造物の間を抜ける石畳を、ランジットは自分達のキャンピング場を探しながら歩いている。店の人に聞いても分からず、とうとうポーターらしい男に聞き、橋を指しながら河の向こう側ですと案内する。
13:10	ビレタンティ着。今夜のテント場は、ANNAPURNA VIEW についでドバンと同じクラスになると思う。1 張りだけなので中央に張られているのだが、四方にあるコテージ、東屋、キッチン小屋、トイレと塀に囲まれて孤立感はない。 コテージ前のナヤプルに通じる道を挟んですぐ前は、辿ってきたダラウンテイ・コーラとアンナ BC から流れ出て、ニューブリッジを抜け、延々と走ってきたモディ・コーラが合流し、動かした巨岩に激突して轟々と音を響かせて流下っていた。やも堪らず、カメラを取って河への降り口を探す。道より河側にあるキャンピング場にコスモ・トレックがテント設営をしている。そこからひょっこりバララムが顔を出して、手招きをしている。流石にミュージシャン感覚が鋭い、そう云えば彼は皆が元気の無い時や、歌いたくなる時はそれを察して、それとなく笛を吹きだし楽しい雰囲気にしてくれた、その彼が私を川原まで連れて行ってくれた。 大石小石を渡って激流に近づくとサムライがパンツ一枚で体を洗っている。声を掛けると気付いて恥ずかしそうに笑う。一般にネパールの人は、仲間内は知らないが、男子でも裸を隠す仕草をするようだ。私は少し離れた場所で靴を脱ぎ、脚を白濁の激流に浸す。フェディからどれだけの距離を歩いたのか、ふやけた足に濁流が気持良い。万感に浸っていると、轟音の間から若い女の声がしたので見ると、日本人のアベックが岩陰で裸身を洗っているサムライの前に出てしまったところだった。日本の若い女性はサムライのパンツ一枚の姿に全然平気なのに、サムライの方がもじもじと困りきっていた。そこに恥の文化とされる日本の現代が象徴されているように私には見えた。 激しく波打つ急流をレンズから見ているとランジットの声がしてアベックに追いやられたサムライと傍に来た。カンチェンジュンガの時、デビの指示に従わず道を違えた後続に、それに気付いたサムライがジュース入りヤカンを持って先回りしようと対岸を懸命に走る姿を、デオラリの激流で助けてくれたことを言いランジットに訳してもらうと、サムライはさっきと同じように何も言わずに恥ずかしそうに笑っていた。アンナプルナ内院からの激流を背景に二人をカメラに収めた。 そこにひょいとシェーパが顔を出す。水中の彼を撮ってやると長い脚で石を渡り、なんと自分の下着を洗ってくれている例のシェルパニの岩棚に帰っていった。何でこの世の女性は脚の長さばかりに拘るのか、なあ、サムライよ、なあ！（後刻談、それをハスタにいうと、あいつ奥さんいるねと笑う） コテージに帰ると二回ほど川向こうに電話を掛けに行っていたハスタが待っていて、にこにこしながら「しぇんしぇい、飛行機大丈夫、切符取れたね」と言ったので、私は思わず彼の手を取って小躍りした。
18:00	東屋には、通りがかりの客も含めて 6、7人の外人がビールを飲んでいた。所在無い私がテント脇でストレッチをしているとその外人達の内 4 人が仕切りにこちらを見て軽い笑い声を立てている。最初はまたかと思って無視していたが執拗な視線に蔑みを感じ笑いに嘲りが混じってきたので、ストレッチの姿勢のままそちらに視線を向けて睨み返した。そんなこともあり、4

人が去った後も、東屋では煩わしいと思い、テント脇の芝生でビニールシートを敷いてくれればいいよと言ったが、シェーパはマチャプチャレが見える所に東屋のテーブルを持ち出し、いつものように豪華にセットしてくれた。

私は覚悟を決めてシェーパの厚意を受ける事にした。彼はタダパニ以来私に対し彼の出来る限りの返礼を尽くしている。朝の紅茶時間の厳守と飲み加減、洗面用の湯加減と出すタイミング、そのタオルの清潔さ、見晴らしの良い場所での食卓設営（食堂が使えなくて偶々始まったのだが）、卓上にしぇんしぇの必需品・楊枝と醤油とタトバニ三点セットの完置等、彼の仕事を通してそれ以前より当たり前の事を当たり前にし続けている。そこに彼の意思を感じる。そして、今夜は二人にとっての最後の晩餐、シェーパが設えてくれた豪華なテーブルで、デュネス、サムライ、バララムが腕を振るった日本料理を思う存分頂こうではないか。

次の事は書きたくないが書いて置く。
素晴らしい夕食を終えて、夕靄に霞むマチャを見ていると前に二言ばかり言葉を交わした泊り客のドイツ人が、お前は日本のビジネスマンだそうだが、何時もこんな食事をしているのかと私に聞いた。その響きには当然のように例のものを感じたので、そうだ、それがどうした？ところで私がビジネスマンだと誰に聞いたかと反問すると東屋に入ろうとしているハスタに顎を向けた。後で確認すると彼は詫びれもしないで肯定した。

予想をしていたからではなく其の肯定をクールに受け入れた。何故なら、彼にしてみれば許してくれない男に対しての最後の当て付けだろうし、そうしなければ気が収まらなかったのだろう。そうして、彼は私をふっ切り、私はそんなハスタを何も言わずに丸ごと飲み込むことで、自分をふっ切れたのだ。だって俺、当年 68 歳なのだ。（あの札幌の姉上様には帰りのカト空港でこの歳をばらした）29 歳の青二才とお友達ごっこをしていては亀の甲じゃなく年の甲が泣くよ、まった　く。そこに気付いたってだけのお話。

付け加えておくと、ハスタは期せずして彼の日本人金持ち説が彼の羨望そのものであることを露呈した。自分達を雇わないからと非難した欧米人を使って金持ちビジネスマンに仕立て上げた私をやっつける。なかなかやるものだ。それで気が収まったかな。ずっと馬鹿殿を演じてきたから今更驚かないよ。それでも爺にとってハスタは可愛い男の子だわさ。
何故って、お前ほど爺の歩幅と歩調に合せて山を越え、野を越え、石段を下り、河中の石を歩いてくれた奴は他にいないからさ、
あのデビだって出来ない事だ、本当に。そこに爺はお前の真の優しさを感じてるのさ。

バンブーで再会した日本人の子にあれだけの愛情を示し、村人の赤ん坊を抱いて頬ずりするお前の顔、授乳の母子をじっと見ているお前、そんなお前に愛情の渇望と交情の拙さを見るのだ。ふっきられた爺がまだお前を気にするなんて事分からないだろう。誰だってどうにもならない明と暗を抱えているのさ。俺のお袋の常套句に「罪を憎んで人を憎まず」というのがある。それを芯にして生きてる奴もいるんだよ。お前は愛される事に慣れてなくて誰にでも、何時でも相手に合せて自分を出してしまう、なのに何時も理解されるとは限らず、予期しないことに戸惑い、ふて腐れ、疑心暗鬼、やり切れなくなると自分でも吃驚の感情の激発をやらかすのだ。

ランジットやサムライとの違いはいつまで母の乳を飲んだかと言う事だ。ランジットはずっと、サムライはおそらく全然、そしてお前は 4 年、そこに原点があると爺は思う。分かり始めた 4 歳が突然愛の庇護者を失ったら、それはトラウマになるだろう。なって当然だろう。ある日突然、周りはすべて硬い手になっている。裸の幼児は身を竦め、保身しなければ生きていけないのだ。

それでもだよ、お前の心の芯には爺の歩幅に合せてアンナプルナ往還路を延々と歩いてくれ

る優しさが育っているのだ。みんなに好い顔して最後に潰れちゃうそんな不器用なお前が爺は好きなのだ。それが、お前が知らないお前の本質だからだ。そんな交情ってのもあるんだぞ。三猿や山猫になりそうになったら、自分の本質は優しさだと思い出せ、いいな。人間誰だって大して変わりはしないのだ、これもお袋が言ってたが、爆発する前に腹の中で、エク・ドゥイ・ティンと数えろ、いいな。みんな、そうやって何とか切り抜けてんだよ。

お袋って何回も言ってごめん、俺も親父の顔あんまり覚えてないのだ。まっ、似た者同士なんだよお前と爺は、だから喧嘩もするわな。なに、お袋の顔覚えてるほうが良いってか。う一ん、そりゃそうだな、やっぱりごめんよ。
金持ち日本人に対する現地の人達の気持が欧米人以上に強いのを、当たり前だが、ハスタが身をもって示した事になる。もって心すべし。

7時頃、理由は分からないが余り乗ってこないハスタを促して、お別れ会を東屋脇で始める。私もカンパをしたが、昼間換金してくれたコスモ・トレックのサーダーが来てからハスタが急に活発になったのは会社が彼にパーティー用の金を持たせてなかったからかも知れない。何れにしろ同じ会社のスタッフ同士飲んで歌って踊り8時位まで楽しんだ。それにしても東屋で飲んでいるゲルマン系外人達のネパール人、其の文化に対する無感覚ぶりに驚きの一語。
踊り歌うアジアの民を奇異なものとして眺め、或いはまったく無視する態度にアジアの一爺として「人類混合説」を唱えたい。

私は、表面上はいざ知らず、内心今一の状態でパーティーが終わり、テントの中でキャンドル読書。8 時ごろから始まったコスモ・トレックのパーティーは凄い盛り上がり、コーラの轟音を抑えて延々と続いている。10 時近く道に出て賑やかな宴会の方を見ていると、私を案じてランジットが来、道端の小屋で商売をしているお上も物騒な時なのに煩いなという感じで道に出てきた。夕方、お上の店で写真を撮らせて貰ったのでその時の礼を言う。彼女に誘われて、店に入り固辞したランジットと地酒を頂く。

何処でもある濁酒の一種だが、甘口でなかなかいける。店といってもトタン屋根にベニヤ張りの三坪位の掘っ立て小屋である、板の間はなくて奥の土間に女の子が二人寝ていた。夕方いた高校生の次男はいなかった。問わず語りの会話で知れたのは、彼女には、山奥の村で百姓をしている夫、ドバイに出稼ぎに行っている長男、次男、寝ている女の子二人合計四人の子供がいる事。そしての話に私は耳に手を添えた。彼女は以前、日本人の50歳位の男性に結婚を申し込まれたが、当時 16 歳だったので決心がつかずにいると、男からも連絡がこなくなってしまったという。目の前で寝ている女の子を見ながら歳を聞くと私はまだ 40 だと悲しげにいう。聞かれた訳を感じての返事だ。

私は、はじめお孫さんですかと言いかけていたのだ。髪はほつれ深い皺が顔を横切り生活の過酷さが滲んでいる。暗い電燈を見つめながら語る彼女の姿は、過酷な現実を生き延びるのに見果てぬ夢を紡ぎながら生きてきた 16 歳の少女の黒いシルエットのように見え、そして、そのシルエットから「ここから連れ出して！」というナキナキの叫び声が聞こえてきた。

暗い影を持つよくある話だが、よくあるのはそこが暗い証拠なので、ランジットにも16歳のシルエットにもそれを言わず、「でも、4 人のお子さんもいて・・」と言いかけて彼女が上の空なのに気付いてやめる。そして何故この話を私にしたのか、もしかしたら、年齢的に合う私を見て16歳以降の違った生を思い浮かべたのかもしれない。どっちが良かったのかなんてとても考える事も出来ない気持、濁酒のせいかナキナキが彼女にダブってきた。
サムライが迎えに来たので小屋を辞し外に出るとまだ続くパーティーの騒ぎをモディ・コーラが掻き消していた。

今度のトレッキングで何がついていないといって、テント場ほどついてないものはない。

	ANNAPURNA　VIEWについで良好と思って寝ていて、人声、物音はさて置き、夜中に起きてトイレに行こうとして歩き出したら、サンダルが、ずぼっとはまるほど芝が水浸し、もう少し寝てたら今度は本当にカヌー・テントになるところだった。 雨も降ってないのにと思い、すぐ気付いたのが簡易水道ホース、タ方コテージの親子が川向こうから引いて来ていたのだ。手繰り寄せて探すと継ぎ目から水がほど走っていた。ランジットが物音で目を覚まし寝ていた東屋から出てきて、私を制して処置してくれた。彼は、この旅の間中常時、つまり四六時中、この爺を守護してくれていたのだ。

デオラリからゴラパニの途中で石楠花

左からサムライ、シェーパー、リンジ、バララム、ランジット（ナヤプルで）

2004 年 3 月 29 日 （ビレタンティ／ナヤプル／ポカラ／カトマンドゥ）	
06:20	ビレタンティ発。6時に朝食を頂く。頼んだら三日目から毎朝お粥を作ってくれて最後も美味しいお粥だった。デュネスはこのトレック中一度も時刻を違わず、且つ客の満足する食事を三度三度提供し続けてくれた。 ところが、最後の朝食を満喫し、所定の作業を終えて東屋に来ると、なんとそこで、まだ寝ているハスタをシェーパが遠慮気味に起こしているではないか。それを見て、「おいっ、お前、お前は確かにサーダーではない、たとえ山でなくても、何をか云わんやだ」と呟く。しかし、腹も立たず、自己の明・暗を意識し自制できないお前を悔しく思うだけである。「もう一度、デビについて修行し直せ、カンチェで彼の何処を見てたのだ。これを乗り越えないと命を預かる本当の山のサーダーにはなれないぞ」とも。 ランジットと荷物のないポーター・リンジと私はナヤプルに向けて出立。その時、リンジが私の傍に来て大きな体を曲げながら泣くような顔で「ダンニャバ」と小さく言った。ランジットの唇がチップと言っている。少ないチップなのに、それでも彼には嬉しかったのだろう。一言の言葉しかなくても互いの感謝の気持が通じて、こちらも嬉しくなった。どんな言葉も心に裏打ちされてはじめて言の葉になり、二つの気持を一つの心にするんだ。それは教則本には書いてないし、書けない事なんだ。なあ、そうだよなリンジ。 ネパール語しか話せないからポーターなんだけど、リンジは読み取ってるよ。一番重い荷をずっと担いでくれてありがとう。もう逢う事も無いだろうけど、達者でな。重いのを背負い過ぎて命を縮めるなよ。 出かけに小屋のお上を見かけるが、昨夜の見果てぬ夢を追う姿に程遠く、現実のネパールの中年女性に帰っていた。何故かほっとした。 モディ・コーラの急流沿いの踏み込まれた道を三人で歩く。7：00ナヤプル発の予定なので私もビスターリはしていられない。ランジットとリンジに挟まれてカンチェばりの足取りで歩いた。曲がりで振り向くとマチャがぼんやり見えた。でも未練は無かった。俺の旅はビレタンティで実質終わった。後はカトマンドゥに安全、確実、迅速に行き着くことだ。 ナヤプルはインド的な街でヒマラヤ漬けの今の私の感覚には馴染まなかった。

7:15	ナヤプルのバス発着場でデュネス・ライ、プルナ・ライ、バララム・マグル、シェーパ・シェルパ、リンジ・シェルパ　そして　ランジット・ライ　に別れを告げた。友よ、さらば！ 良い旅だった。本当に有難う。 タクシーではぼんやりと周囲の景色を見ていた。舗装道路は雑木林の山の中腹を、カーブを繰り返しながら走り、同乗のハスタは上機嫌で運転手と話している。彼なりにほっとした気分なのだろう。確かにそうだろう。後はカトマンドゥのホテルに私を届ければいいのだ。 うとうとっとした時、ハスタの「しぇんしぇ、山、山」という声がした。左の窓を見ると通り過ぎる木や家の上にあのアンナプルナ達がとんでもない大きさで、白いオーロラのように勢揃いをしていた。停車を頼むと見通しのきく場所で停まってくれた。場所は　カーレ辺りなのだろうか。左からサウスが、アンナⅠが　ヒュンチュリが　マチャプチャレが　アンナⅢが、みんな泰然自若として鎮座していた。 内院で味わった羊水の浮遊感が甦り、全身から何かが漏れていき、内奥の世界が空になるのを意識した。カンチェンジュンガ・ロナークでの自然との一体感が、そして、それに人間を加えた一体感が新たに訪れたのだ。これほどの幸福感を何と形容したらいいのか。私は満足してタクシーに戻った。そして振り返らなかった。何故なら一体感に別れはないと心の中で言いながら。 タクシーはあっという間にフェディの前を通り過ぎた。１０人の、１対９の日本人金持ち珍道中が始まった場所である。その時、私の胸中は、まるで山と人が数珠つなぎになってここに帰ってきたみたいだった。考えれば、毎日毎晩その土地土地で思い出せないほどの事に出会い、魂が揺さぶられた。ある時の山や人は、何かの化身のようであり、イースター島のモヤイ像のようであり、そして、涙を堪える水子地蔵のようであった。私が観音様から頂くものは、しかし、私次第なのだと、この時深く気付いていた。その意味では、私の旅は実質的には終わってはいないのだ。 前方から異様な風体の人間が近づいて来ているのをフロントガラス越しに気付いていた。太陽を反射して揺らめく道路の真中をぼうぼうの髪のまま、白髭に埋まる顔面からは鋭く透明な眼光が彼方に向けて放たれていた。車が速度を落とし彼を避けて脇を走る。すれ違ったのは紛れも無いサドゥーであった。かつてベナレスで見た彼等より、たった一人のせいかその実在感は圧倒的である。 アンナ様はなんという御まけをご用意なされているのですか。残された課題が私次第、それが内省・自己省察・林住を越えた遊行にあると言われるのですか。確かに私は、老師・しぇんしぇいなどとぬかして、９人の弟子を引き引き連れたような錯覚に陥り、アンナ街道を恥さらしなバカ殿旅行を繰りひろげてきましたが、でも然しであります。サドゥーはこの世のすべてを捨てているのであります。私に同じことを要求なされる訳ですか、ええいいです、無い財産も、捨てられた社会なんぞも平気で捨てましょう、うーん、でもでもです、愛するフミちゃんもですか、いやそれは逆があっても、その逆は地獄に落ちても出来ません。 どうぞ、そこんところだけはお許し下さい。第一、サドゥーでは、この世にちょっかいが出せませんです。わっかりました。見るものを無為に化すほどの馬鹿殿に、いやさ、サドゥーになるべく、それらしく彼方此方をしっかり見つめて歩きます。 振り向けばあの野郎、いやあのお方、陽炎状の道の真中をまだ歩いてなさる。
08:30	ポカラ着。色とりどりのチベット風ホテルに入る。空港が近いらしく、エンジンの音が気持良く聞こえてくる。飛んでる飛んでる！　部屋の窓から、赤いブーゲンビリアが見える。まるでインドのアゥーランガバードのホテル、昼近くまで寝たが、夢にサドゥーは現れず。

	玄関のソファーや庭のパラソルの下でうたた寝していたハスタとホテルのレストランで一緒に食事をする。ハスタは落ち着いた雰囲気で笑いも絶やさない。私も記念にハスタお薦めのネパール料理・ダルバートを注文する。それが美味しかったので話も弾む。こういう時の彼は、ジョウクを飛ばし、話題を切らさない。私がダルを平らげるとにこにこしながら、「しぇんしぇー、そんなに美味しいのなら、明日、カトマンドゥの僕の部屋にダルを食べに来て下さい。作ります。」と誘ってくれた。それを耳にしながら、全身の筋肉から力が抜けていくのを感じた。この気持の幸せ状態は他に比べられるものがない。この招待はガイド以上の範囲だもの。それになんたってハスタだよ。
15:30	ポカラ発。雲に隠れて山は見えなかった。それで良かった。ANNAPURNA 以外の山を見ても仕様がなかった。
16:00	カトマンドゥ着。飛行機が着陸した時、これで日本に帰れると思った。 空港の車輌待機場でコスモのワンボックスが出迎えてくれた。二週間ぶりのカトマンドゥは何時もの通りだった。ハスタは会社の人と話をしていた。勿論ネパール語だけだった。途中で、広大な塀に囲まれた森があったので、何かと尋ねても、最初は気付かなかった。 何時もの道路を走って、車はホテル・ギャンジョンに着いた。 ビレタンティのパーティーの時、ルピー不足でハスタとランジットには渡せなかったチップを、ホテルのフロントで換金して渡そうとすると荷物を置いてハスタは居なくなっていた。隣にいたコスモの社員に聞くと車だという。チップとも言えず、キャンセルしたポカラのホテル代金をハスタに払わなくてはというと硬い表情でそうしてくれと言った。異を言った覚えは無いのにと思いながら、ハスタを探して玄関から見ると右隅に停車している車の助手席に彼が居たが、ぎこちなく視線を避ける。 社員に来るようにと言付けてロビーで待つ。近づいて来たハスタはレストランの時の彼とは別人のように、小さく縮まっていた。渡しながら、いい旅だったよ、ありがとうと言っても上の空、か細くダンネをいって去っていった。私は何か狐につままれたような気持でいた。それは、チップへの礼のことではなく、昼まではあんなにご機嫌だった彼が何故急転したのかだった。はじめは、やっと煩い爺いとおさらばできる、顔も見たくねえなのか等と考えてみたが、ならば明日のご招待はおかしい。ふっと浮んできたのはポカラのキャンセル、飛行機の変更、ギャンジョンの変更などそれに伴うコスモの煩雑、仕事支払い増、もしかしたら空港からの車中でそれを言われたのではないのか、もっとうまく説得出来ないのかと。そうかも知れない、きっとそうだろう。 でも、その時同時に胸を突いていたのは、仮にそうだとしても、彼の急転を私自身がつくり出してきたのではないのかという疑念である。ハスタは理屈を並べてせっつく私に負け、帰れば会社に怒られる。そうなれば彼の明・暗の急転は起こらない筈は無い。挟まれたあいつはああするより他に術を知らないのだ。この場合、会社は当然だろう、詰まるところサイを投げたのはバカ殿なのである。じゃあ今までに、俺は何回やっちゃったんだ。そりゃあ原因の全部じゃないさ、でも、テント場、部屋泊り、そして兵隊さんのこと、これだけあれば彼を逆撫するには十分の質量である。 なんともいいようのない気分に落ち込む。長々と風呂に浸かった後、気分換えに、日本に持ち帰ろうと思っていた臭い靴下やシャツを洗濯する。 ホテル・ギャンジョンからみる景色は二年前と少しも変わらない。前の大通りを行き交う車の混雑、人々の果てしない往来、インフラはまったくの無政府状態なのに3，4階建ての集合住宅は各家庭そろって窓に花を飾り、屋上にはたくさんの植木鉢が置かれている。よく憶えているのはすぐ前のビルの屋上に鳩小屋があって、20羽位の鳩が飛び交う光景、そして、道路を越したビルの屋上も相変わらず洗濯物の干し場だった。違ったのは、一日中（前の時は3

	日も予備日があったので一日中窓から眺めていた）階下に降りられない少女に替わって少年がいたこと位だった。二人とも、閑を作っては下の道路を眺めていた。まるで屋上の檻から下界の自由を見るように、そして大人が上がってくると、こそっと戸口に消えるのも同じであった。
18:00	ホテルを出て、２００m位先にある日本人経営の和食屋に向かう。これも2年前に知った。途中、土産屋があったので、絵葉書を仕入れる。アンナの雰囲気が出ているのが結構あった。お陰でタメルまで行かずに済んだ。 毎日、デュネスの和食を食べているので、特にというのではなく、中華では下痢になるからだ。ハスタは油のせいだと言う。そうかも知れない。 暗くなった歩道にストレイトチルドレンがごろごろしている。2年前より増えている感じがする。ボランテアらしい若い女性が世話をしている。でもどうして男の子ばかりなのか。 ネパールに来るたびに、遊びに来るだけでなく、日本にいても、ただ山を見にいくだけでなく、何か子供たちにしてやれないかと思うのだが、今だに何もしないでいる。高知大の子がボランテア団体を探すのも大変だと言っていた。個人の方法があるのだろうか。 帰りしなホテルの前の酒屋で、ウイスキーなどを買い込み久しぶりに深酒をする。 明日、ハスタの部屋で彼の手料理のダルを頂くのを夢見ながら。 とうとうハスタからの連絡はない。まあ、仕方ないか。でもさあ、一体何があったんだ、にこにこしてたのが急に下向いて、さよならも言わずに帰っちゃって、こっちは訳が分かんないよ、説明しろよ、いつもこれなんだからさ、これじゃあ餓鬼のむくれだよ。こっちの身にもなれよ。会社の事で言えないのなら、客には仕事面でやってくれよ、そっちの事で嫌なことあっても、そのままこっちにぶつけるなよ、甘ったれるな。俺たちもう最後の日なんだぜ、いいのかよ、こんな仕事して。コスモで仕事するのが良いって言ってたろう。あんなに自分を堪えて一生懸命ガイドやったのに最後に来て、客をおっぽり出していいのかよ、爺に仕事もらって嬉しかったって言ったろう。客としてじゃなくて招待したんなら尚更だぜ。断りの電話ぐらい寄越せよ、ふっ切った奴を自分で招待したんだぜ。嘘だったのかよ、えっ。でもお前にしちゃあ違うんだよな。 ならせめて、方便でも言いから説明しろ、それが大人の知恵ちゅうもんだ。爺はそれも出来ねえお前が情けなくて涙も出ねえよ。なあ、言って見りゃあ、俺とお前は、明暗両方ぶっつけ合って来たんだ、似たもの同士なんだ。一番の仲じゃねえか、だから、喧嘩もするんだ。まだそこが分からねえのか。言いてえ事があるなら言えばいいじゃねえか。男かよそれでもお前。問題があるなら、それに正面からぶつかれ、逃げるな。 下向いて三猿しても何にも解決しないんだぜ、両方が傷ついたまんまなんだよ。そしてまた別の事で繰り返す。しまいには、我慢できなくなって爆発、山猫だ。そいつは事態をもっと悪くするだけで、何の役にもたちゃあしねんだよ。そこを越えなきゃだめなんだ。それには自分がどんな人間かを考えて、自分を替えろ。目に涙で母を探す四っつのお前、胸を叩いて泣き喚くそれからのお前をいい加減で捨てろ、愛を求めるお前から、愛を与えるお前に替われ、お前は、自分では気付いてないけど、すばらしい愛を持っているんだぞ。爺はお前の歩幅が好きなんだ。だから、お前から逃げないよ、お前がお前を捨てて大人になるまでは、いいな。それがアンナ様から頂いた爺の宿題なんだ。 爺は、カンチェの時に皆にニックネームをつけたが、あれはね、名前を憶えるための方便なんだ。でも、お前がハスタのままなのは、日本の高速道路に「蓮田」と言う名前の休憩場があって、それを頂いたんだ。爺はその名前が好きなのさ。お前も蓮の花を知ってるだろう、薄いピンク色の美しい花さ、あの花は仏さんの身代わりみたいなものなのだ、田は泥んこの田んぼことさ、蓮の美しい花が、泥んこの田圃に咲くところに意味があるのだ。

	煩悩の世界が田んぼで、そこから綺麗な花が咲くのさ、詰り解脱、悟りの象徴なんだ蓮の花は。だから、蓮の葉っぱの上に仏さん座ってんだ。爺はお前が自分の田圃に、いつか自分の蓮の花を咲かせて欲しいと願ってるのさ。爺は仏教徒じゃないが、仏様は大好きなんだ。 爺はあのサドゥー・行者の如く、取るべき道の真中を彼方に目をやって歩いて行くよ。たまには爺の道を一緒に歩いてみねえか、えっ、蓮田！ 何時に寝たのか定かではないが、外は静かになっていたようだ。

2004 年 3 月 30 日 （カトマンドゥ出発）	
	ホテルの食堂で、アメリカンという朝定を。なかなかだがデュネスの次。 午前中、絵葉書の残りと荷物の準備。ハスタ、無しの飛礫。仕方なし。
12:55	ランジット、約束の時間5分前にロビーに現れる。流石の孫息子よ。 二人でタメルに行く。来る度に土産にする民芸リュックを何時もの店で買うのに付き合ってくれたのだ。早く言えば、孫息子と爺のデイトなり。何時もの店は潰れたのか幾ら探してもない。二人で暑い昼日中、車やオートバイでごった返すタメルを徘徊する。孫息子は山の時以上に爺の守護に奮闘する。 代わりの店で土産を買い、アンナの地図とグルン族の音楽 CD を彼のお薦めの店で購入する。リラックスして自信満々の孫息子と最高に楽しく、幸せなショッピングでありました。爺故に、こんな幸せは二度と味わえないのだと胆に命じての至福のデイトでありました。ネパールよ、ありがとう！ 孫息子・ランジット・ライに心からの感謝を捧げると共に、君を誇りに思う。 世の中、学歴じゃああありません。努力と才覚と誠実の三セットです。せんせい流に言えば、夢を持て、夢を追え、そして、夢を諦めるな となる。 君の未来に栄光あれ！
17:30	コスモにジョシ氏を訪ねる。 ハスタは自分が頼んだサーダー、何も言わずに帰国と思っていたが、彼の山猫を感じて二つの事だけをお伝えする。それに内容は個人関係を越えている。 1. ダパニにおける、軍隊に対する私の行動。 止む無く近づいたが、抗議や抵抗はしていない。冷静に嘆願したのみ。中野氏と石渡、中野氏とコスモの信頼関係を恣意的な報告で壊されたくない。同時に、大きな社会問題に関する事であるから。 2. ハスタのサーダーと呼ぶな発言。 個人的理由で会社から託された責任を放棄するような発言は、特に軍事衝突、盗難事件の発生時には軽率の謗りを免れない。
18:00	和食屋にコスモ持ちの夕食を食べに行く途中で、デビとサムライ遇う。両方の歩道で大声出して感激の対面、二人が車を避けて道路を渡りまた握手、何でこんなに嬉しいのだろう。兎に角、二人も一緒に和食屋に入ってもらう。床屋にいってさっぱりしたサムライを冷やかすとにこにこしながら土産だと言って紅茶を差し出した。食事を誘っても固辞し、通訳で来たデビも仕事が残っていると言って帰っていった。一人になると100度のサウナから外に出たような感じで、アンバランスな気持のままビールを飲んだ。 サムライの「しぇんしぇ、ランタン」と言う声が目の微笑と共に頭の中でいつまでも熱い。デュネスの和食には勝てない和食屋で一人酒をしていても仕方ないので、注文した品が来ない内に店を出てしまった。普通ならガイドが付き合うのによ。

	今夜も路上にかなりのの子供達がいた。昨夜とは違う若い女性ボランテアが世話をしていた。水とバナナと少々をこんな事しか出来ない自分を恥ながら年若い彼女に渡し、鬱々としてホテルに戻った。
20:00	ホテルに　デビとランジットが見送りに来てくれる。 私は、二人の顔を見て歓喜しながら、内心の鬱々感が霧散していくのを感じていた。そして何故か、これで帰れる、気分的に助かったと思った。今度は、私が何かをふっ切ったようだ。サドゥーが私の前を行く。 デビは大きな黒のビニール袋を抱えて入ってきて、「これ中野さーん、飯田さーん、せんせえーぃ、お土産でーす」と彼独特の調子で、嬉しそうに言いながら、それをロビーに置いた、「えっ、こんなに入らないよ」と言うと「大丈夫でーす。手荷物でーす。4kでーす」とまた歌うように言いながら、ランジットと二人でビール瓶3本とウイスキー3本を新聞紙に包み始めた。それに、かなりの大きさの紅茶 3 箱。でも、見ているうちに「よしっ、抱えて帰ろうじゃないのこの男の友情を、何キロでもかまやしない」と腹を決めた。 ランジットが先に帰るというので玄関先に出ると彼は包みを出して、「これは、僕からのお土産です。受け取ってください。紅茶は奥さんと娘さんへのお土産です」といい、すがすがしい顔で「今度の先生との旅はとってもよかったです。有難うございました」と挨拶した。そして、いい笑顔で去っていった。その背中に少しだけ大人の雰囲気が出てきたように見えたのは、爺の孫息子への贔屓目か。ロビーに引き返す耳に「ランタンリルンにご一緒したいです」というランジットの若々しい声が耳鳴りのようにリフレインされた。
20:30	コスモのワゴン車には、中国へ行くと言うジョシさんと彼の夫人、娘さんが乗っていた。荷物を積み込んだ後、デビがエンジンのかかった車のドアーまで来て、「せんせーい、私もランタンへ一緒に行きまーす。待ってまーす」とハイな声で叫び、幅広の額に汗を光らせ、泣き出しそうな満面の笑みで送ってくれた。仕事であろうが何であろうが、こんなに実直な笑みと気遣いで人をもてなす人間が今の日本にいるだろうか。 車窓に見える夜のカトマンドゥの街は、政情不安もあってか薄暗く、時たま見える人だかりも、土盛りのように固まっている。貧しさや汚さが同じなら、暗闇ても何処か明るい雰囲気の5年前の街に早く戻ってもらいたい。それでも、トリブヴァン国際空港に向かっている今、帰国の実感が薄れ、まるで日本に出国するような気分になっている。
21:00頃	空港に着き、待合室に入るとジョシ氏率いる中国人観光団約 30 人と欧米人、ネパール人が多く、日本人は以外に少なかった。途中で挨拶に来た彼に聞くと、仏教遺跡訪問ツアーとのこと、中国の文化政策の変化と経済的発展を目の当たりにした思いがする。 それから、僅かな時間、前に書いた石楠花コスモ・トレックの三人と言葉を交わしただけで（齢68を告白）、一人旅らしく自宅まで、ずっと自分だけの世界に浸っていた。閉視の世界には、しばらくアンナの旅が脈絡もなく甦っていたが、いつか思いは一つになり、私は　Dhyan Bahadur　Ray さん　、通称　デビ　に語りかけていた。 デビさん、見送りに来てくれて有難う。 君も知っている通り、ランジットもサムライも見送ってくれた。とっても感激している。君達の温かい気持に心が震える思いだ。今の私の気持では、自分の国がネパールと日本が合わさった状態になっています。 三人が見送りに来てくれたのは、カンチェンジュンガに三人一緒に行ったからと言う事もあるけど、アンナに行かなかったデビまで来てくれたのは、例え昨年、君に日本で会ったにしても、唯それだけではないものを君に感じました。

単刀直入に言えば、今度のアンナプルナ内院トレッキングにハスタがサーダーで、たった一人の客が私である事に不安・危惧を抱いていたからでしょう。何故なら、二人がよく似ているのを君は知っているからです。だから、合わないところまでぶっつけ合ってしまうだろうと心配していた筈です。それは全く当たっていました。まさか此処までとは私も予想しませんでしたが。カンチェンジュンガの時は君がサーダーで彼はサブでした。それにあの時の彼はまだコスモに入りたてだったらしいから、それほど自分を出していなかったかもしれません。正直云って、今回も君とランジットと行きたかったのですが、君は一人旅にお願いするには大物過ぎ、それにどうしても一緒に行きたいランジットまでお願いするのは気が引けたのであの時のハスタを君の代わりに指名したのです。これから話す事は、ハスタは私が指名したのだ、今度の旅が結果的にも良かった、豊穣だったと私が本当に思っているんだという事を絶対に忘れないで聞いて下さい。

色々ありましたが、特に軍隊との遭遇は（現地では勿論の事だろうと思いますが、不穏な情勢があると言うのは日本でも知られています。ですから私はなんぞの場合の事をある程度覚悟して出かけました）、サーダー体験の浅いだろう彼にとっては大きなショックだったでしょう。まあ、あれが無ければ、普通のトレッキングで終わったのかもしれません。でも、言い方を換えれば、あんな事態にぶつかったので、二人が君の心配するような状況になり、彼はいざ知らず、私にとっては、豊穣と思える経験が出来たのかもしれません。彼にも言いたいのですが、私は、＜人間万事塞翁が馬＞式で考えます。

ところで、君が知ってる二人の共通点は、ある線を越えると自分をそのまま出してしまうと言うところでしょう。私に関して云えば、仲良くなると客である事を忘れて、人間同士、友達同士の感覚、関係になろうとする。彼が「俺をサーダーと呼ぶな」事件の時も、いけない仲良くなり過ぎたと感じました。もう少し、私が距離を置いていれば、避けられたかなと。結果的に云えば、そうさせたのは自分だとも思いました。その後も、二人の間にはやっさもっさが多少ありましたが、爺である私が爺である事を思い出して、だんだん爺らしくなりましたので、事態を客観的に見てとれるようになりました。そして、彼が、彼の明暗を剥き出しにすればするほど、私の自省の切っ掛けになり、彼を丸ごと受け入れられるかどうかが私の課題なのだと自覚できるようになりました。この年になって自己変革を迫られた訳です。
いい年をして何をしているのか、老子的に言えば、無為自然を、何故実践できないのかです。観音様に贈られた最も厳しい出会いをどうするのかが爺に突きつけられました。或いは、1頭の羊なのか、99 頭なのかを問われているわけです。若ければ、逃げ出したり、時間稼ぎをしたり出来ますが68歳になっていては、時間的にもそれは許されません。自分の人生が問われているのですから。

ハスタは、生来の三猿（見ざる、聞かざる、云わざる）でも、山猫（激怒）でもない訳で、過酷な境遇の所為だと思うのです。それを解きほぐすにはどうしたらいいのか、彼のいい面を引き出すにはどうすればいいか、彼の努力は勿論必要ですが、周りのサポートが不可欠になってきます。彼自身に変革を発起させるには、今度のようなこたが必要だつたのかもしれません。爺が豊穣と言うのは、傲慢に聞こえるかも知れませんが、そんな凄い出会いに出会えたことなのです。といってハスタが顔を出さなかったのですから出会いはまだ続いているわけで、爺は引き下がるわけにも死ぬ訳にも行きません。せめて彼が、三猿と山猫にならないくらいに、自己抑制力を育てて欲しいと願っているのです。それには彼のトラウマを消してやらなければなりません。

そこで君に頼みたいのは彼を育んで欲しいという事です。ハスタはデビを敬愛しています。君の言う事なら素直に聞くでしょう。彼の良さを引き出して自信をつけてやって下さい。＜可愛がって鍛えろ＞が私の現役時代のモットーでした。見果てぬ夢と同じく、見果てぬ愛を求める彼の現実の愛を育てるには現実の愛しかありません。愛を受ければ愛が育ち、自分に愛があるのを感じれば自ら自信を持ち、右顧左眄せず自らをコントロウールし自己主張が出来る

	ようになると思うのです。大人にしてやって下さい。私はあの子が今だに心配です。日本にいては、日常的な共通体験を通じてのカウンセリング出来ませんので代わりの方法を考えようと思っています。 私は年ですから、受け入れられないことを受け入れられます。私の事は心配しないで下さい。トレックの間中、私には二人のエンジェルボウイが付いていましたし、ハスタを含め、皆良くしてくれました。ハスタと私だけをクローズアップしないで下さい。ガイドと客では、ハスタが不利になります。それでは彼が可愛そうです。並みの爺客ではないのですから余計です。 アンナプルナの山山と出会った人々、自然と人間の混在の事象、事件の全てに心揺さぶられました。それらに生きている事を実感し、それが喜びだったのです。私はストレートにものを言います。言葉そのままにとって下さい。真のトレッキングをした訳で、これ以上の至福はありません。 三人が異口同音に、ランタンリルン行きを誘ってくれるのが何よりの癒しであり、励ましです。ほんとうに一緒に行きましょう。誰かが「世界一美しい谷」と言ったそうですね。その谷を、君・ランジット・サムライ・大人の蓮田達と一緒にトレックしたいと、サドゥーもどきの「しぇんしぇい」は願っています。それがきっと、私の最後のヒマラヤとなるでしょうから。

2004 年 3 月 31 日 （カトマンドゥ／関空／伊丹／羽田）	
00:30	ネパール・カトマンドゥ発。
11:00	関西空港着。伊丹空港経由。
15:00	羽田空港着。港南台経由
16:20	帰宅。ママと時懐の優しい出迎えを受ける。 やはり、盆子（猫）はバンブーの頃、死にそうだったいう。 中野氏から無事下山の電話ありとの事。

元気に出迎えた盆子

豊穣の旅を終えて

帰国後、描いた油絵、アンナプルナ主峰と
守人プルナ・ライ（F20 号）

2004 年 4 月 1 日 （自宅にて）	
晴れ	晴れ、庭の海堂と源平桃が見てくれとばかりに咲き誇り、枯れかかった家の石楠花が生き返って、二輪咲いていた。皆々様に厚く感謝いたします。 9 日、妻と妹、三人で富士霊園、母の墓前に無事帰国を報告＆感謝。桜満開。 この旅日記をいつも気持良く送り出し迎えてくれる、愛する豊穣のママ文子様に捧げる 04・4・25 PM 5:50 被豊穣者パパ孝司。

脱稿するのに20日かかり、二回トレックしたことになる。時間忘却、日々燃焼。
さて、キャンバスがお待ちかね。温かな雪岳と母なる大地を描きたいな、うん。
KANNAさま、終わりました。ダンニャバード。又お会いしたいです。

後　記

しぇんしぇいが呑気にヒマラヤを歩いていた頃、イラクでは連日戦闘が激化し、状況は混迷の度を深め、米軍のファルージャ攻撃でシーア派までが抗米武力闘争に参加し、ますます先の見えない事態になっている。
　帰国と同時に、日本人三人がイラクで武装勢力に拉致され、一週間後に釈放される。その間の、留守家族に対応して、政府、政党、一般社会、マスコミが激しくきたないバッシングを行う。

自己責任、費用の弁済等々家族は堪りかねて謝罪し、帰国した三人も精神的外傷を受けて引きこもる。
　その状況を伝えるフランスの新聞記者は「日本には真の自由がない」と書き、かの米国務長官パゥエルは「より良い目的のため、自ら危険を冒した日本人がいたことを私はうれしく思う」と発言している。

　なんともやり切れない差である。その上国会議員の人質（5人）に対する抗日発言＝反日発言＝攻撃が出るに及んで、小熊英二の指摘が日本の現実、近未来への警鐘であることに間違いはない。
　　ヒマラヤで見た現実は、日本および世界の現実でもある。

　大江健三郎は
「テロという不寛容への、不寛容による反撃とは別の、第三の道を探したいと願う市民が現れるのは、国際化された民主主義社会で当然のことです」と発言している。
　イラク人質事件の被害者、高遠菜穂子さんへのバクダッドの孤児院から届いたメッセージは「この孤児院の少年たちはあなたの息子であり、あなたがここに戻ってきてまた会えることを祈っています。あなたがとても必要です」
この３年で歴史は１００年後戻りしてしまったようだ。

でも、このままで言い訳がない。命が根底から軽んぜられ、生きることが軽んぜられ、死ぬことが軽んぜられる、この状況がいいって誰がいえるのか。
少しでも早く、元の道に戻り、正夢を求めて歴史をつなぐトレックをしなくては。